



式法秘書
二

079
1.729
2



1729
2



生間流式法秘書拔萃卷之二

家元 生間正起編次

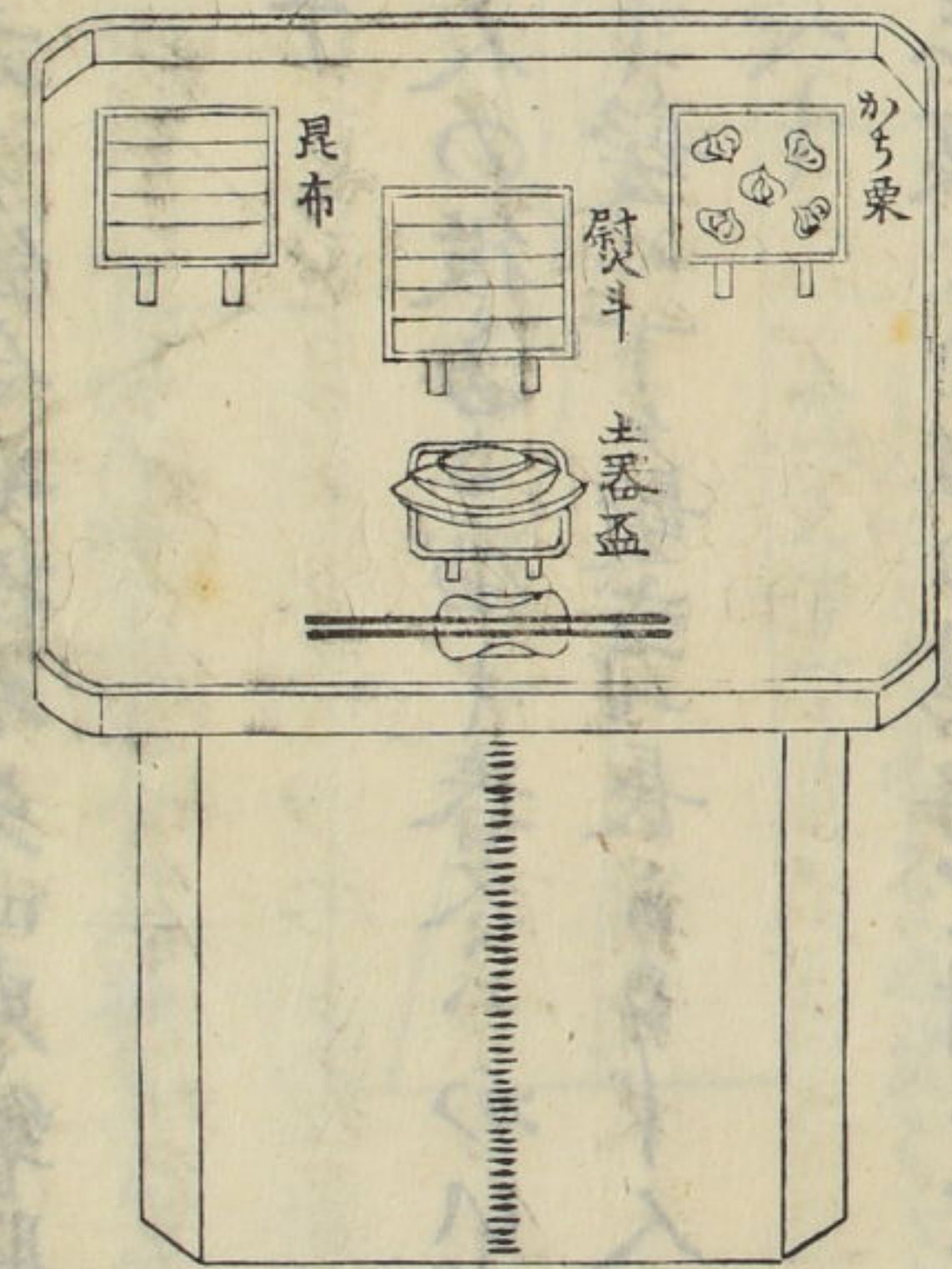
式三獻之事

先づ手掛箸始く式と濟一次に土器の三ツ盃と三方とのせ初
献引渡。二献も三献も躬と集りて三献く式と行ふ
入又と舅入く時ハ引渡く三方は三ツ盃と組合せし色も三
献く式と行ふ流義もより聲入舅入く時も盃と引渡の三方
は組合せざるもあま當今と畧して婚禮の時も引渡く三方
は三ツ盃と組合せ用う引渡く三方は三ツ盃と組合せ用ひし時
を左記の圖に如くは手掛く圖ハ民家婚姻の部にあ
はる

生間流式法秘書拔萃卷之二

初就引渡。二就うち身。三就己の煎と用カても苦しうは
古々二就己の煎。三就うち身と用カるなりうち身
己の煎といふ詞のあはれせよとりていつとなと二就己
うち身と用カる換はなれり古人もこの言葉のあはれ
よよりて二就うち身。三就己の煎と用カ杯とかは
志書もある也これらの子ハとあむるは足らざれども右
と同換の事にて船盛羽盛と自然の格勢をり言ひあは
せし為船盛と上座は置ものごとく得違ひとなはるのあ
る右等し事ハ世は知る人少きゆへ笑ふものも亦少し
志も主客あどの言葉のあはれよよりて主と先きよし
て客と後よれる事あはる三尺の童子も必ず笑ふ座志出
る也

さらの事ハ一例となはる足らざれども言葉のあはれを志
のこよも座あはる事といはるる爰は志し置きた
る也
引渡は三ツ盃と組合せたる圖



うしろをひきつ煎の三方に組合せ様を糸四巻饗膳に部は
記し置きたり

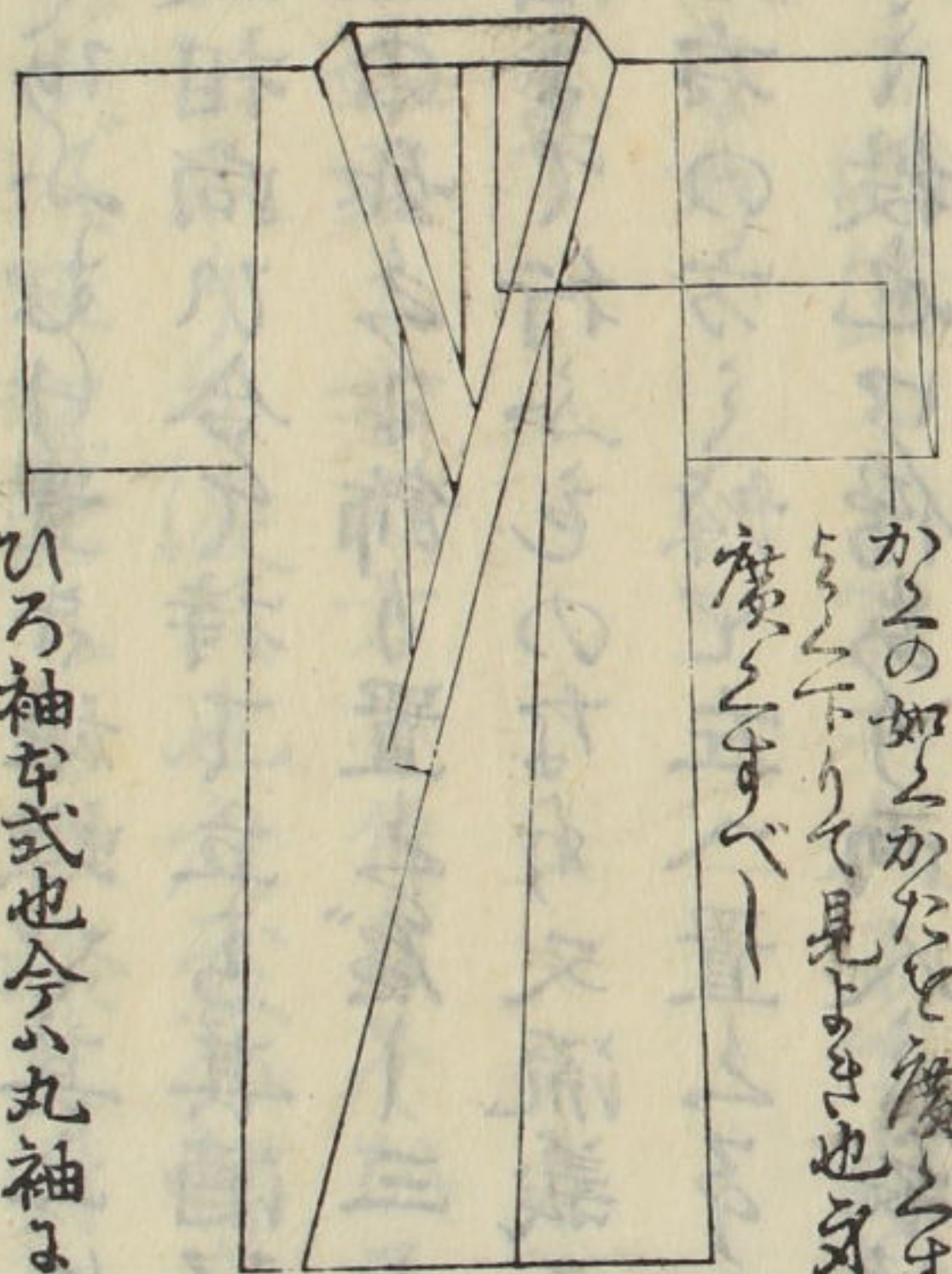
酌人之事

有親ありて身分もよき人の役ある座し春冬ハかひどり復
秋九月八日追ハを腰巻ある座し髪ハ下ケ髪或ハ長ものどり人よき
座し加人も同換はなげべし

腰巻を表ハ白のきぶ志裏ハ白の精好と付るなり裏表
ともハ白のきぶしと用をあると丸きぶしといふ模様を
定まりなしあれハ上蔭あどの用をらす腰巻也色直しの
時々表緋裏相應の色目あるものはあらたむべし腰巻
の着換ハ腰の所は衿とあてあ袖ハ口の相向ふ換は左右

ともハ内へ折りうき糸よと色細き丸どけの帯と志て
右の方にてあともあり志うと結びるあもとも一所よと
さむ座し帯の仕換袴の着様ハ帯の通あるべし

腰巻之畧圖



かこの如くかたを履とすれが袖西服へ
さし下りて見よ也身をもさし
座とすべし

ひろ袖式也今ハ丸袖よしと用也

瓶子之役人之事

三月流ハ去必書被袴卷之三

三

瓶子に役を一人一同は床の前へ進み寄り瓶子と取り時雌蝶と先へとり中央よりふむけ置き雄蝶と其上へ重ねけり置て瓶子と取り兩人相向ひ合て持て立ち其酒と銚子と提とようつし瓶子と元の如く飾り置と座し三々九度の式をあのうつしたる酒まで行ふものなり又流義よりとりて左の方へ蝶と右へおき右の方へ蝶と左へ置とすもあふなり瓶子に役を當日第一に役也は傳あり兩人に衣体を前より同志

通ひ役人の事

中老り又若小姓衆に役多座し衣体を前より同志これハ配膳の役なり

手長衆の事

通ひに役人より老分の人勤めらる座し衣体を前より同じ御前より手長けへ西膝とつき膳部杯のすへとま換よして渡り座し次より手長を膳部杯のおくれざる様よん掛とべし一間より三人づつといへども時宜よよ重二人まで勤むる事もある也これハ取次ぎの役なり

奴添の事

乳人或若老女に役也姫君に右の方より付きそひ居て何よても手より持ち給ふものを取りて渡り也社殿の都合より左の方より居ても苦しあふび又聲君へも奴添と付る事もあるなり

式三獻に次身

先づ手掛箸始式と濟し次は引渡して初献と姫君三献系
りて賀君へ賀君其盃まで三献系り其盃と納む次は已り煎
と据ゑると二枚目の盃まで賀君三献系りて姫君へ賀君其
盃まで三献系り其盃と納む次は已り文と据ゑると三枚目
の盃まで姫君三献系りて賀君へ賀君三献系り其盃と納む
是まで三々九度相濟む也式三献の盃と取りかきさぶら以
前を姫君と客人として上座はす盃も姫君より飲み初る
也式三献の盃と取りかきしたる以上は何献系るとも皆賀
君より飲むとて免何事とも賀君よりとてめりふ也の也

同酌勤免様事

女酌加へ兩人とも一同は床の前へ系り銚子提と持ち女酌
を左の方へ少し膝と居なほり加へ右の方へ少し膝と居
なほりて相向ひ合て一同は立て志きり居り傳る時瓶子の
役兩人進み出前記に如く銚子と提とへ酒とらつて床へ
元々如くは瓶子は蜂形とさして飾り置と其あひまは提の
酒と銚子へ加へ相向ひ合て兩人とも次の間う或は其間へ
下座をかきさぶら居る時瓶子の役兩人とも一同は勝多へ
入る也初献引渡と姫君と賀君とへ据ゑたる時酌人左の
手は三方とさきさげ右の手は銚子と持ち加へと一同は立ち
三足半進みいで出結ひとな志姫君の方へ向ひ行と座座
をどしなるは其間の肉へ三足半う五足程入りて出結ひと

なり夫より加へて姫君の方より向ひ少し下座よりひのへ居る也
 也。又人姫君へ一献系らせ加へよきがら時加へて早と進み
 寄り加へて元々座よりひのへ居り又一人又一献系らせし時加
 へ又右の如くなはれ也。夫より其盃と智君へ系らせ智君三献
 し次才ハ右と同前也。智君三献相濟バ又人直下座へ退
 之其時勝手より二献し剪と持ち出姫君と智君とへ据ゑ
 せバ又進みいづで智君の方へ系り二枚目の土器よて初
 献の如く三献系らせ其盃と姫君へ前の如く又三献系らせ
 又下座へ退之其時勝手よりいづれと持ち出西君へ据ゑ
 退之時又進み出姫君へ三枚目の盃よて前の如く三献
 系らせ其盃と智君へ智君三献系らせしれど其三方と

座より上座の中央より置り銚子のこしと持て退之事ありとい
 へども大低を三方と置りて志て持ち退き加へと共は最初
 出結びとなせ志所よて入り結びとなして勝手へ入り座し
 結び様より口傳あり其次才を畧し又盃と三方と扱ふ役人と
 才加へと三人出る事もある也。時寫よとるべし初献引渡
 二献より三献より文と姫君と智君へすすむにハ先後と
 あきび一同すすむべし流義より智君と人左右より着と云悦
 あきども他流し事ゆへ爰に記さる

色直し事

古を三ツ目の朝色直とて姫君迎ふ袖と着し帯かひどりも
 帯付相應の品よあはるゑらる也。智君色直し装束を姫君

持系し装束より下らためらるるなり色直し時ハ聳君先へ出
上座ハ姫君後へ出て下座ハ着し對座ハ志と祢も色ハ取替
る也當今ハ婚姻ハ夜ハ色直しともなは色直しの式ハ其夜
ハ行を尤なる事なる座ハ

色直しの盃を聳君よりとめ給ふべし盃ハ式三献の時
如く土器三ツ盃まで盃と取かき事もある又土器一枚宛三
方ハのせ面々へ据ゑる事もゆるなり何れハなはとも烹雜
三献ハ式を行ふべし烹雜三献ハ蛤雜糞鬣まで三献ハ式
ハ行ふといふ次ハ饗膳と出す饗膳ハ何れも箸と取らあ
系ハ侍となは座ハ夫より嶋臺と出は右ハ何れハ祝義の大
切なるもの也待上臈へも据ゑる事もあるなり右ハ双方へ

一同ハ据ゑ引之時も一同ハ引き連連ある座のふは次ハ引
替ハ膳部と出はこの時聳君ハ暫らと勝手へ入らせらる座
志其間ハ聳君ハ兩親出て嫁君ハ對面すこれハ尤も待上臈
ハ指圖たるべし兩親對面ハ後親類も出て嫁ハ對面する事
もある也對面ハ盃相濟し時分ハ聳君社家へ出らるべき
也のなまじも當今ハ畧して聳君勝手へ入らば其儘着せし
居る也あれらも待上臈ハ取斗ハ任す座ハ比より相應の饗
應ある也此席ハ着社人多きゆへ加へし役人を一定ハ社ハ
ひり居らば砂人の後ハ付き添ひ砂人ハ勝手より方ハひ
りへ居り加へしなはべし尤も何れへも三献ハ系ハする
もの也出結び入結びの事ハ式三献ハ時の如くすべし畧ハ

なごのうら

饗膳ハ高盛也香立きそと付る香立きそとの事ハ第一
卷ニ饗膳ニ車ヲ申四卷ニ何れも委之記一置多里

引替膳部ニ事

引替膳部トハ饗膳ニ引替ニ出以喰料の膳部トイフ也右ニ
分限と時宜ニ應ジ馳走するものけへ就立等ト爰ニ記一置
座ニ要なきゆへ記さざらん

陰陽ニ盃ニ事

陰陽ニ盃ニ付ていろくの祝となすものあり一祝ニ色直
の就ハ陽也式の三就ハ陰なりト又一祝ニ晝の就ハ陽也夜
の就ハ陰也トイフ右ニ晝夜ト以て陰陽ト分つといへども

吉日良辰ト撰び行ふ予ゆへ夜ト以てこの式ト行ふ何ト
以て陰陽ニ分ちとなんや又湯臺の盃銀の盃ニありて陰
陽ト分つといふ祝あるも是を器物トよつて陰陽の名ト
かりあるものニ志て就の予ニあらず右等ニ祝ハ何れを取
ニ足らば陰陽ニ盃トイフ也就の次申ニ事也ト傳

真所床飾ニ事

あれを夫婦饗應ニ間也又其際トもいふ床ニ掛物ハ墨繪ト
ニ座一置物ハ洲濱臺ト鶴ニ羽又ハ鶴鶴臺トもト一花ト
松一色の立華ト然る座一箱籠又ハ米盛トト三方ト紐
ニ床ト置き床ト下の左右ト犬張子ト置ト座ト世ト是間ト
盃ト床盃トイふて比の間へ蒲團ト爰ト盃事ト成ト古来

より傳ふる式事の様よりいふものあれども古を更に右換の
事ななき也心得違とならざる

犬張子は俗祝多しといへども取は足らぬ犬を元来魔障
と退ふるもの也故に紫宸殿は拍犬と置うれ所々神社
に前にも拍犬と置ふるあれ皆悪魔と退ふる為に置ふる
るもの也小児誕生の時も小児に傍に犬張子と置き犬張
子なき時ハ小児に額に犬と字とをかへ婚禮の時犬張子と
用ふるも右に譯よりて也然るは婚禮の時用ふる犬張
子は限り種々の祝とならぬ犬張子に主意と知らざる也
の也笑ふ處なき事なり古書に宿直に犬と書きあるは出
能犬張子の事也犬張子の中へハ御守ふごと入れるもの

なり

翌朝祝儀及使者の事

子掛及び式三献と法に如く済し夫婦は饗應ある處に嫁君
を早朝に里方両親へ使者と以て滞りなると相済し昔に申遣
はさるる處に遠路あるは女にていづくと申遣はさるるもの也
尊君に親より表向きの使者と以て同様は申遣すものな
り嫁君の両親より尊君に両親へ教へ使者と立ちしもの
の也表向の使者双方より老女と遣すこれと女房の使と云
は使者へ絹ふごと給ふるもの也と法に如くゆい傳ふるも
も法にあらずざるゆへ時宜はまざる處に
俗に部屋見舞といふ事ありこれハ中人以下の事なりん

得置とる座一

三ツ目と事

嫁君里へ捲り糸とる日限を婚禮の日より七日目迄の内
は糸とる座一三ツ目迄を智君嫁君とも其家と出ざる事古
實也當今も三ツ目より里へ捲り糸とるなり音物を両親と
初免家族一統へ相應は用意ありて輿より先へ使者と以て
蒸物餅樽肴金銀もぐ分限は應じて遣すもの也智君よりも
嫁君より里方へ音物より外當日用を床飾の品及饗膳とも長
持り入れて遣すべし里方より智君より両親と初め一家へ
智君と初免智君より一家へも相應は音物あるべきもの也使
者より時刻は兼て申合せおき双方の使者途中にて相逢ふ様

遣はものなりこの音物もて双方とも一家打寄り祝義の
饗應あるべし是と三ツ目の祝といふ右等と事を媒人の取
斗もて兼て双方へ申合せ置とべき事也當今ハ教餅又を皆
子餅あどやとく五百八十の餅と双方より取らば事
あれども古はハなき事也三ツ目餅といふは神は供へ両親
へも送り祝ふ事ハある也餅の数は定りハなき事と心得
る座一

右教餅と遣す時を行器へ何荷も入れる也大取りの餅
なまは十二と十八小取りの餅ふれば廿八と卅六入れ一
荷は仕立となり緒の留様は陰陽の分ちあるなり足る法
は如く折形より包む水引もて結ぶ座一残りの餅ハ唐櫃

よ納き遣すべし遠路ふればかますよ入れ遣也かますと
ハむしろよてあまたる袋也餅のかびざる為よあまは
入き者細引二筋よて十文字より十端と両よあは結び和
久よつと遣はべし和久を檜く木地也四角よ足あり作り
方ちかますの敷よ應し恰好よ作るべし棒通一の重物な
どハ長持の如し油單ハ用わは兩覆と添ふ座し

五ツ目事

五ツ目ハ聳君嫁君く里へ系らる日也俗よこれと聳入
といふあの日も尤も手掛より引渡意難三秋の式ありて引
出物とも出し九婚禮く時の如くすべし歎く勤怠様も同様
なり此時く盃を嫁君く父親より初秋と飲みくぐめ三秋目

く盃を聳君よて飲み納むるもの也右相濟ミ夫より饗應あ
る座し引出物を初秋納りし時勝手より腰く物と持ちつて
て聳君へ渡す聳君いたゞき直よ立て次く間へ行き腰く物
とさしうへ出て一禮して着冠す大小ふれば大を次く間よ
置るべし時宜より引出物と嫁君く父親手づのく聳君へ
渡さる事もあるなり是等の事ハ媒人より兼て双方へ申
合せ置る座事也腰く物と錦の袋よ入きて出さる事も
ある也紐く結様よは傳あり

七ツ目事

嫁君く父親聳君の方へ系らる日也聳君の両親とくぐめ

一家中へ相應の進物ある座し右に嫁君の父親系の時刻より前より使者を以て贈られ其時何の刻系上と案内いひ置る座し扱嫁君の父親系らるれば双方對面し上より手掛する式三献し次より智入る時の如くなるべし此時を嫁君の父親と智君の父親と智君と三人着座し盃なり

三人着座三献し次より事

初献を嫁君の親よりとめ智君の親へ智君の親三献のきて其盃を智君へ智君三献飲みて其盃を納む二献目を智君の親よりとめ嫁君の親へ嫁君の親三献のきて其盃を智君へ智君三献のきて其盃を納む三献目を智君よりとめ嫁君の親へ嫁君の親三献のきて智君の親へ智君の親三献

のきて納め夫より相應の饗應となす也右相濟みて後眞はて嫁君の親と智君の母親と對面し上より盃事ある座し右等の事ハ尤も媒人より兼て双方へ申合せ置る座し事也右を引渡す盃を組合せ置き面々へ据ゑたる仕方也此時の勤免様を婚禮の時とかかりある事ある也

御厨子黒棚の事

飾り様は習あり指圖を大上臈とれとな志中老とれと飾り七ツ目迄を日々飾り様とかへる也當日より三ツ目迄ハ出さし假粧の間は置る座し飾り品はいつくありといへども陽は近き道具ハ御厨子は陰は近き道具ハ黒棚は飾りべし

品數多と置き合さずして作らるゝ様は飾ると云一とな
に座し

世は御厨子の御厨子所にて食物と納免置之棚也黒棚を
厨棚也とりや棚と畧して云る棚といふこの説と傳ふる
ものありこの説大にあやまれり是のあやまりと云ふさ
んが為は我家に秘書中より御厨子黒棚之事といふこと
爰にもらしぬ抑御厨子といふを厨子あるゆへに云也此
の厨子を嫁君に守袋又ハ守本尊と納免置之厨子也それ
ゆへ此棚へ飾る物を陽に近き道具と用ふる也黒棚と云
を齒黒棚也と云る棚と畧して黒棚といひしもの也夫ゆ
へ此の棚へは陰に近き道具と飾る也堂上方も御厨子を

婚禮の時婦人にかき来たる胸に守と納免置之ものなり
と申されし也是も御厨子所などといふ説のあやま
りなる事と知る座しこれと儀杖の向へ飾るハ御厨子黒
棚鏡臺と飾るべし其他書棚なども飾る也左は御厨子
黒棚に飾り様一例と示し置と

香匙火箸の所へ香箸灰さぐし銀はさこ灰押なども立置
とものといへども又これと香盆を置ともある也

香盆とは香爐香盆火敷箱たどん箱香包たきから入の類と
置と云ふり

火取香爐を木にて作り内より紙を張り外に塗り蒔
繪などとなし蓋はハか紙の網と用ひ是れも紙又ハ紙

あどよ白いと留むる香爐也
硯箱を五重の硯箱なり

御厨子棚之畧圖 手箱

香盆	香匙 火箸	沉箱
扉内子 狛犬と 置と 紙	扉内へ 守と納む 半文箱 一對	短冊箱 長文箱 水引箱 火と 火と 火と
料紙	硯箱	薰物 つが

御厨子之道具と黒棚へ飾る事ハ苦しむるざれども黒棚

之道具と御厨子へ飾る座ふらば

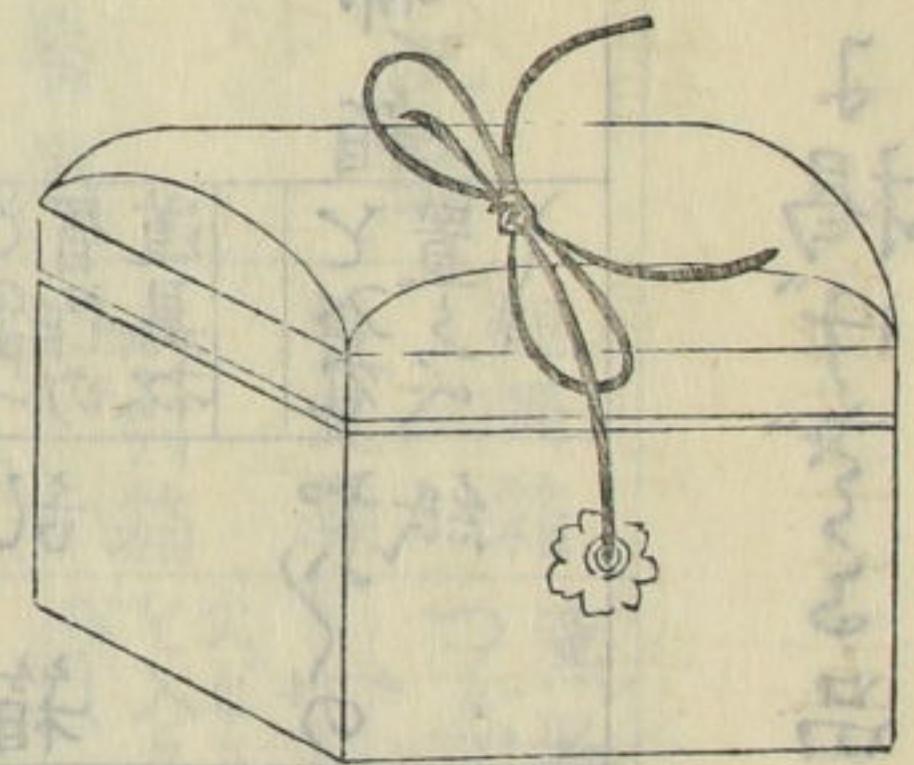
黒棚之畧圖

拂箱	昆布箱	元結箱
と入れ 置と 紙	この内へ 眉作の 道具杯 乱箱	うがい 茶碗 菌黒箱 渡箱

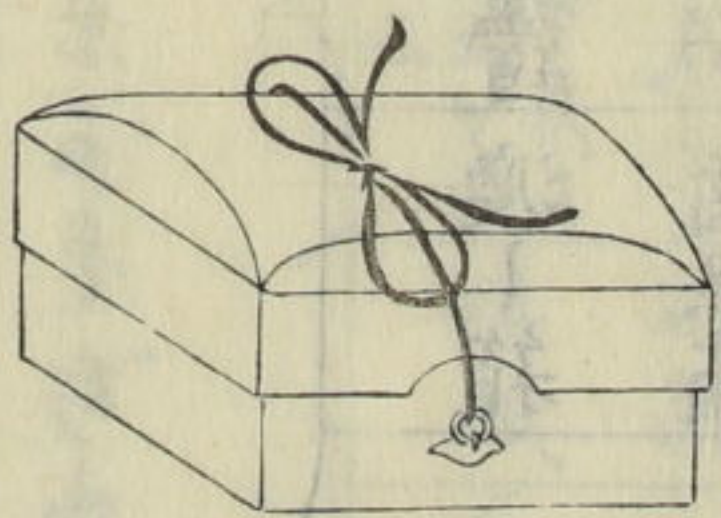
御厨子黒棚之飾り様より右に掲げざる品猶これあは
ども爰にこれと畧し

手箱

角々へ丸ミと付け塗りて梨子地又ハ蒔繪あどとなに緒を紅也長サ一尺三寸八分房共常々手箱ハ小箱五ツありニツの四角たまる箱ハ白粉と入れ一ツの長さ箱ハ眉ずミ分ケ目の糸あどと入れニツの丸ミ箱ハ鏡珠敷と入きるなり



長サ一尺
幅七寸五分
高サ八寸



長サ八寸
幅七寸
高サ三寸

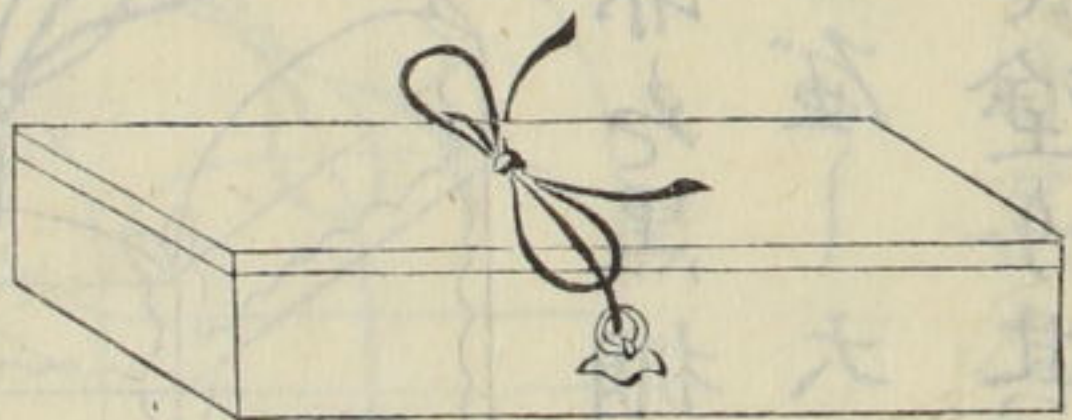
沉箱

薰物及小道具と入れ箱也掛子あり掛子ミ下ハ香包掛子ミ中ハ小箱六ツ

あり模様を桐壺帚木若紫紅葉の賀花の宴あふひ緒を紅也

短冊箱

何甚も肉のり但一内二分ハ中の仕切板大めんさん蓋短冊と二枚あふびよ一々百枚入れ上よかん
長文箱
高サ二寸五分
幅二寸六分
緒ハ紅のハッ打



長サ一尺二寸五分
幅五寸二分
高サ五寸五分



水引箱

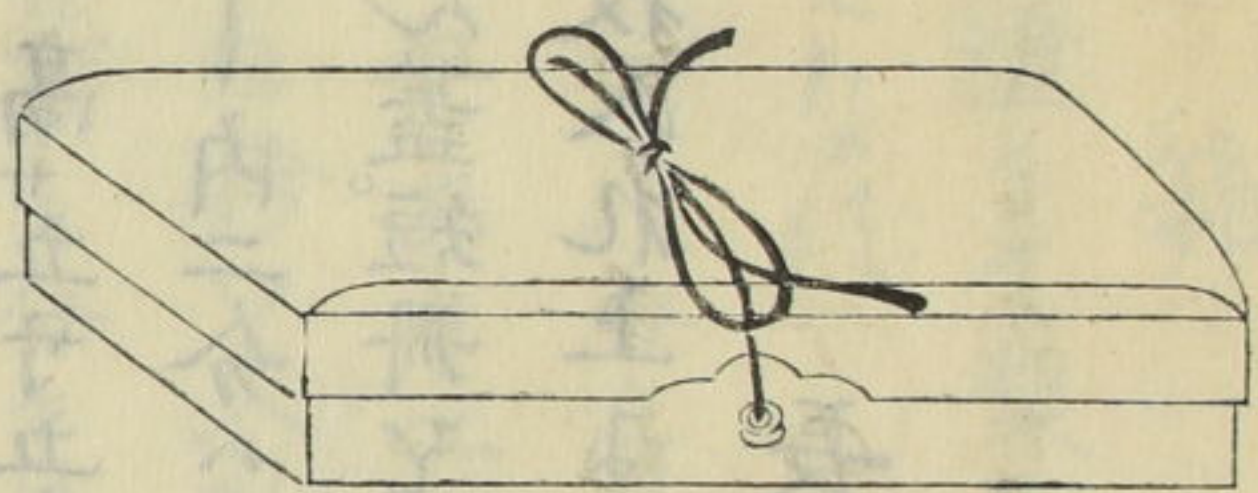
長サ一尺三寸

幅二寸

高サ一寸五分

緒ハ紅のハツ

打



角赤

四角何れ

小角赤

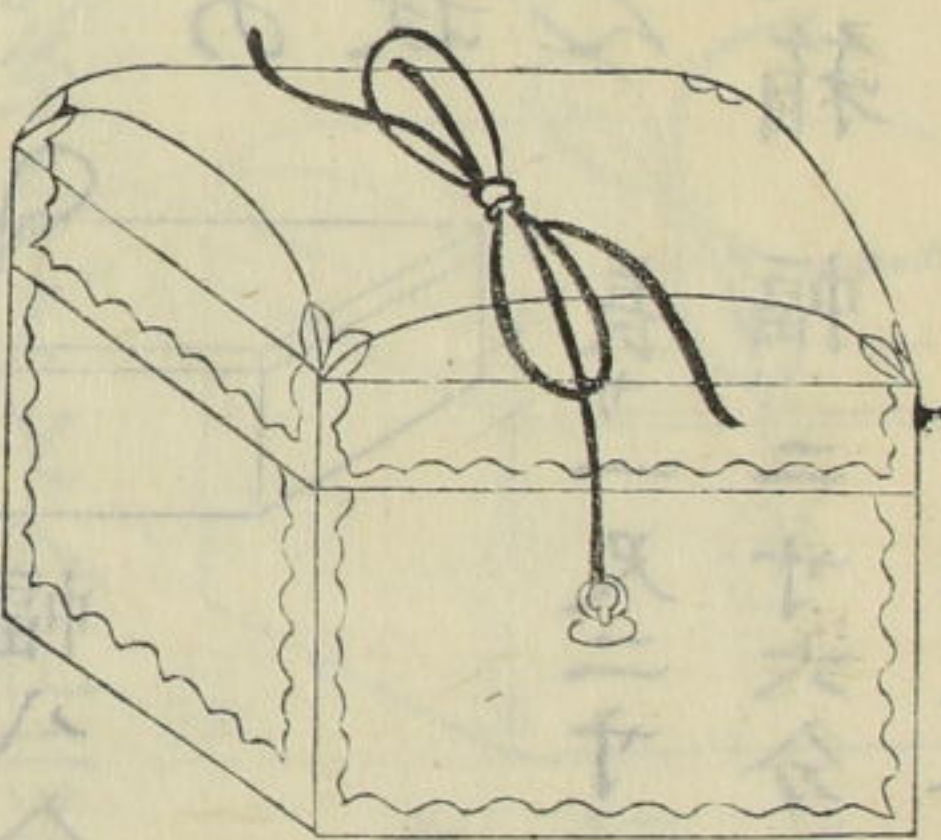
長サ八寸

幅六寸

高サ七寸

蓋二寸五分

合セ口緒ハ紅也



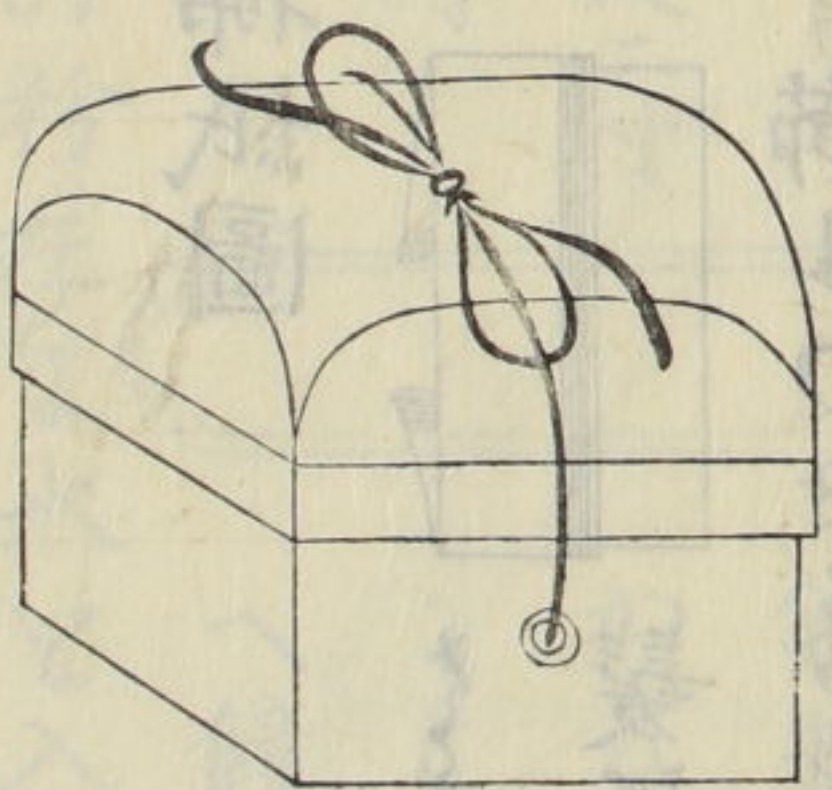
角赤は、大角赤、小角赤あり。大角赤を黒棚に飾る。蓋は、大角赤、小角赤とも何れも角は、角どりとさせ、朱漆にて塗り、其外に所を黒又を蒔繪にもほふるなり。

白箱を、手箱に大サ也。掛子あり。蓋をやらう蓋に、掛子と香盆。下のげす板に取手と付け、其上へ香盆と組付盆也。

元結箱

この箱へは元結。繪元結などに入れらるなり。

古の元結を皆糸也。其糸を紫のこぞめの糸。紅の糸。むらぶの糸に類として、今の元結と大に異なり。髻も古を皆糸にて作りしとのなり。



緒ハ紅也。長サ二尺

五寸房とも

箱に長サ一尺

幅七寸

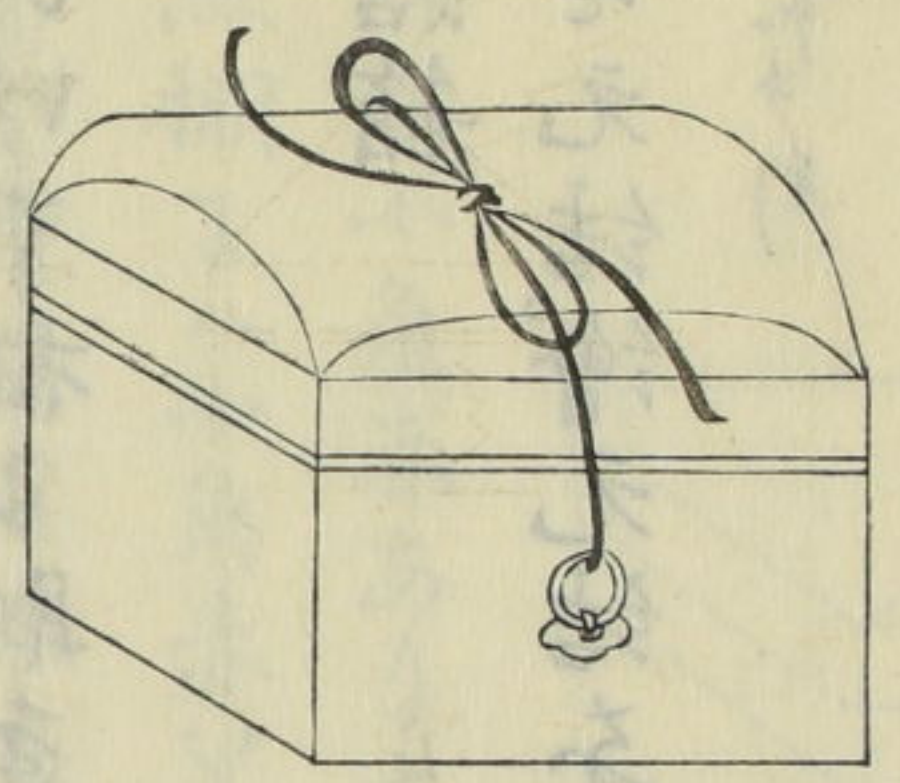
高サ八寸

繪元結

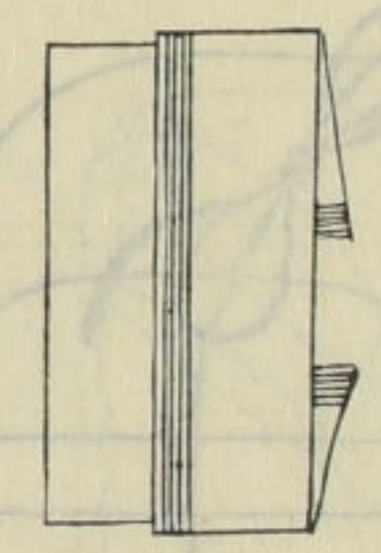
左右とも先より一寸五分斗し所迄丸き志んに入れそ
造り松竹梅鶴亀あごとと魚がきたる金紙と若き口
徑三分長九寸斗し作りこれとかとの如くは結び
たるものなり

拂箱

長サ一尺
幅七寸五分
高サ八寸
緒ハ紅のハツ
打



拂紙圖



とらひ紙とハ女の
髪ととけつる時
櫛よつきとめる髪と拂ひ入る
あう紙也金紙又ハ銀紙よて右
のとと折るなり

うちきせ蓋也とらひと入る箱也掛子あり

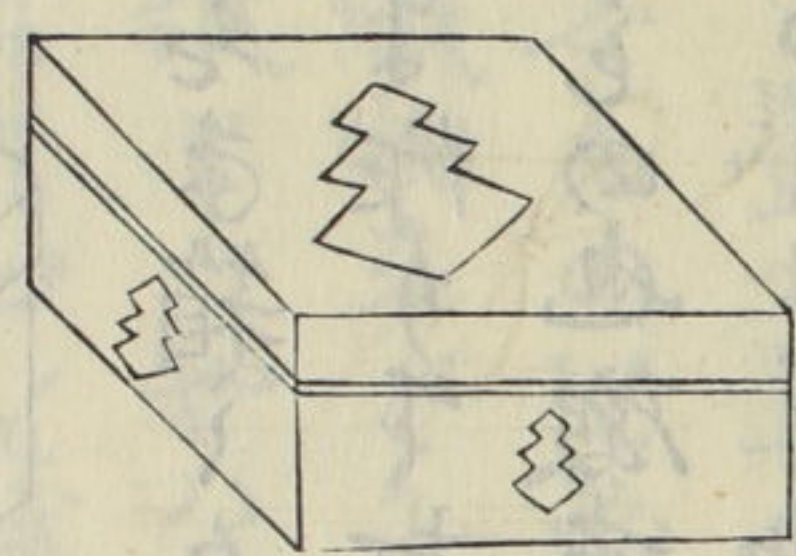
昆布箱

此箱へ結昆布あごとと入る置き齒とろとの時口祝は用る也

長サ三寸八分

幅三寸

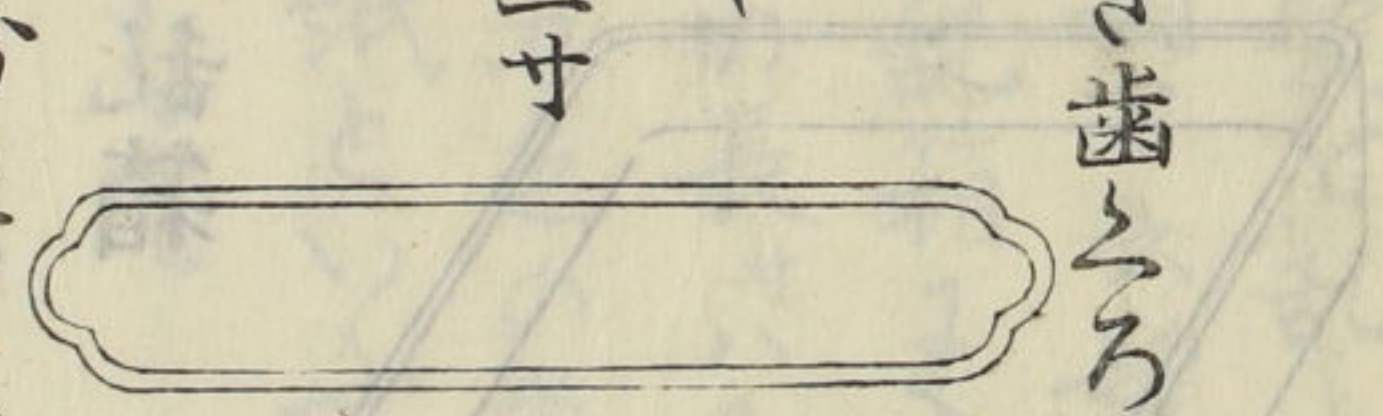
高サ三寸



渡

長サ一尺二寸

幅三寸

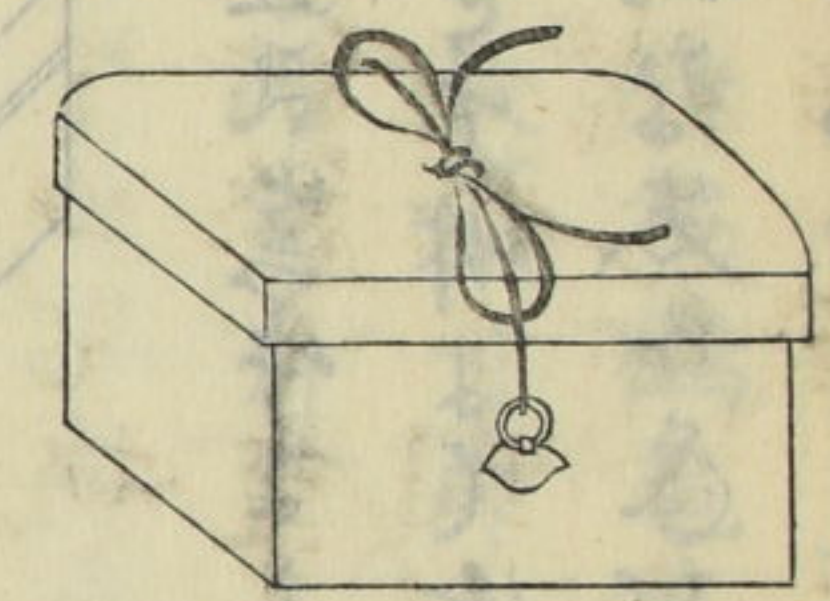


鐵漿^{カネ}と付けると
かなんきの上へ横
よこれと渡し其上
へ鐘子は鐵漿と入

きて右よ置き志んはふしの粉左よ木と入れ置ととの也
古を拔簀とて竹よて作りたるもの也周圍はとあり
畧よわらふなる志んはと付けると時耳だといの上へ横は渡
志んはとのあり

齒黒箱

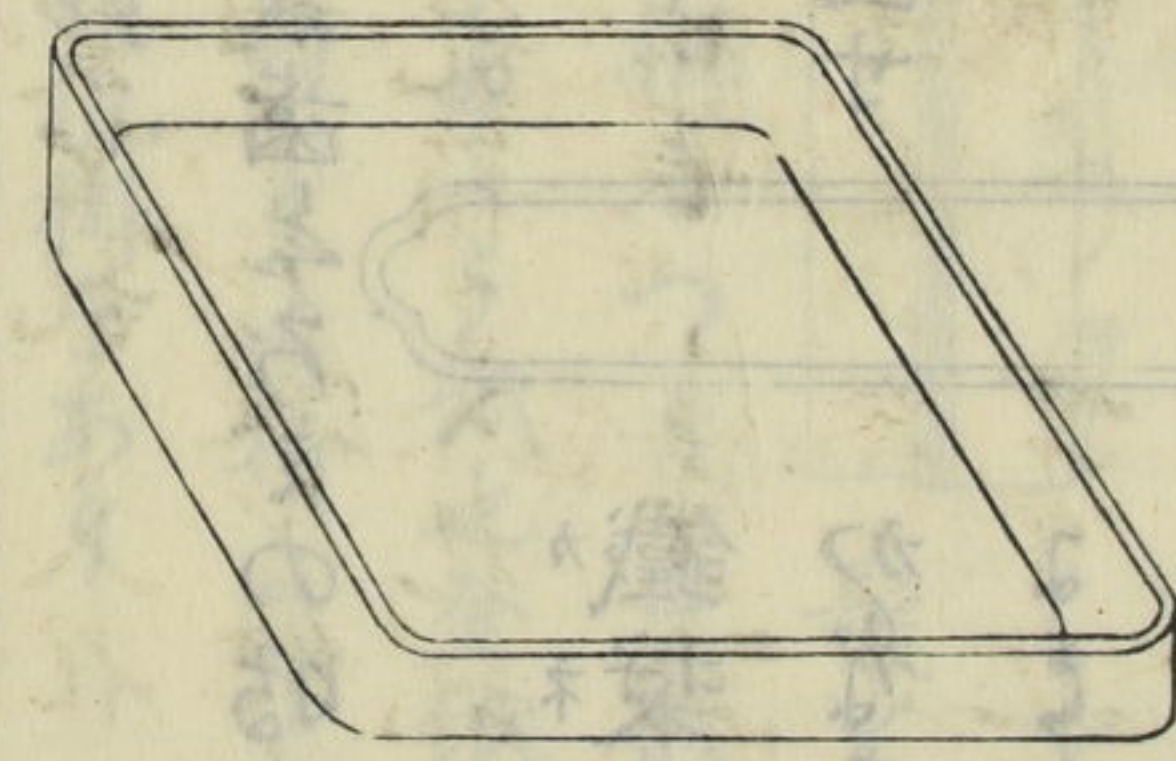
長廿七寸
幅五寸五分
高廿六寸



内の上のきより葉楊枝など
入れ下より次より粉の類
入るなり

打乱箱

此箱の元を箱くけど也
それと別より作りて打乱箱と
名付帯しもの也腹中より
おすべらうしよて歩歩行の
時女中後より打乱箱へおす
べらうしよの先と受けて来る也



長廿二尺二寸
横八寸
高廿三寸二分

御寝の時を御枕元より置き御髪と乱し入れ給ふなり後
世打乱箱といふと畧して乱箱と云髪と結ふ時より擲其
他は道具と畳へ置くらばして乱箱に入れ乱箱より下よりハ
櫛巾といふものも後也櫛巾の長廿六尺横巾三尺六寸
両面とも織物などより作り五色の糸より上ぎ志は
やしの紙とハヤいらうしよ紙といふも也鐵漿とつけ
て後これより口と拭ふものなり

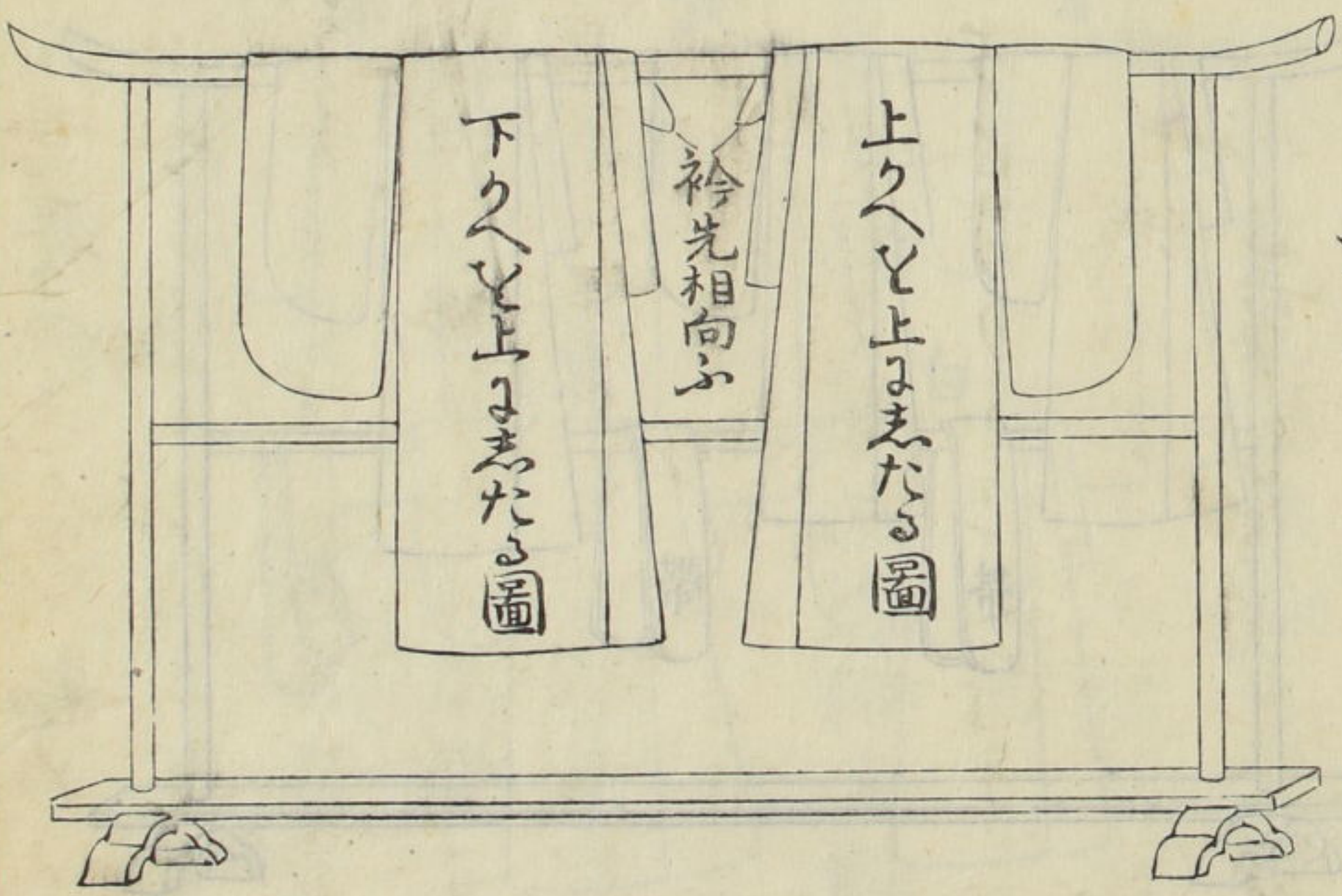
衣桁飾り事

衣桁を部屋又を仮控へ間より飾り置くらべし飾り様を當日を
上より装束譬へハ被^{カキ}又わらうしよけし類翌朝よりを小袖の色
目より次第とたて飾り座し七ツ目迄ハ日より取り替へ飾り

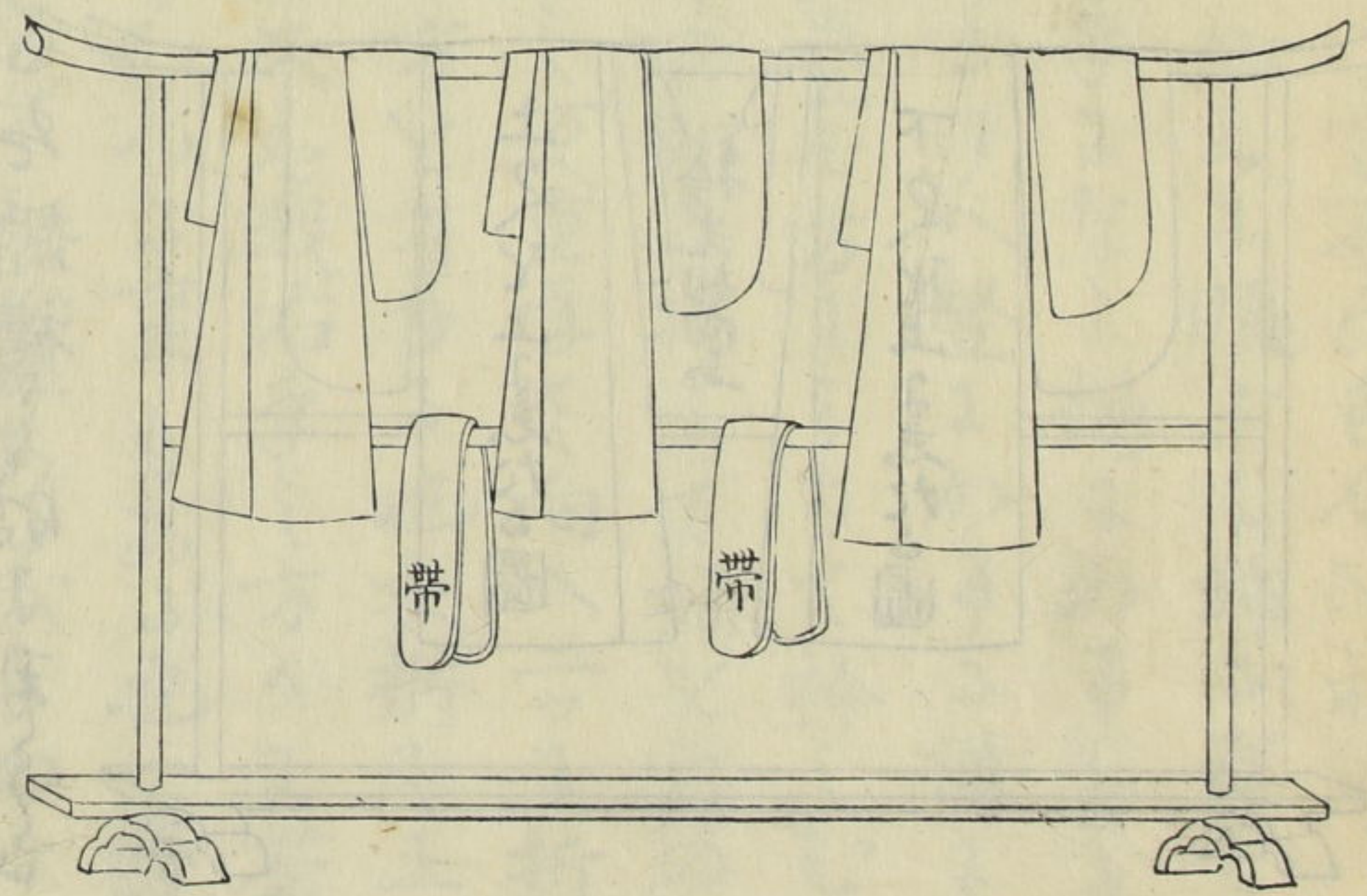
の也色目の次糸を四季より當季の色合と初めにかき
 もの也春を青夏を紅といふ如くは順くは飾る座し古を袖
 口より方と前よりなして衿と裏手よりなす横にかき多るもの也
 其後装束より仕立様かひりたるけへ豎にかき多る様よりなす
 畳の様より陰陽より別あり其の畳の方よりなして衿よりむき様も
 又かひる也畳の様より先づ常の如く持ちて袖より右の方へ重
 衿より向へ二ツより折る是陽也左の方へ重手より向へ二ツより折るこれ
 陰也迎小袖なども此の畳の方より用ふる也衣桁より上より三枚
 かき多る時を下より二枚両股より又我右手より方より帯よりけ
 添ふべし流義よりよめて少しかひる事もある也一概より心得
 座より衣桁より置合せより必ず廣蓋あるべしかけ替る時

これより用ふる爰より掲ぎ置きたるを婚禮の時より用ふる小袖掛
 様の例なり

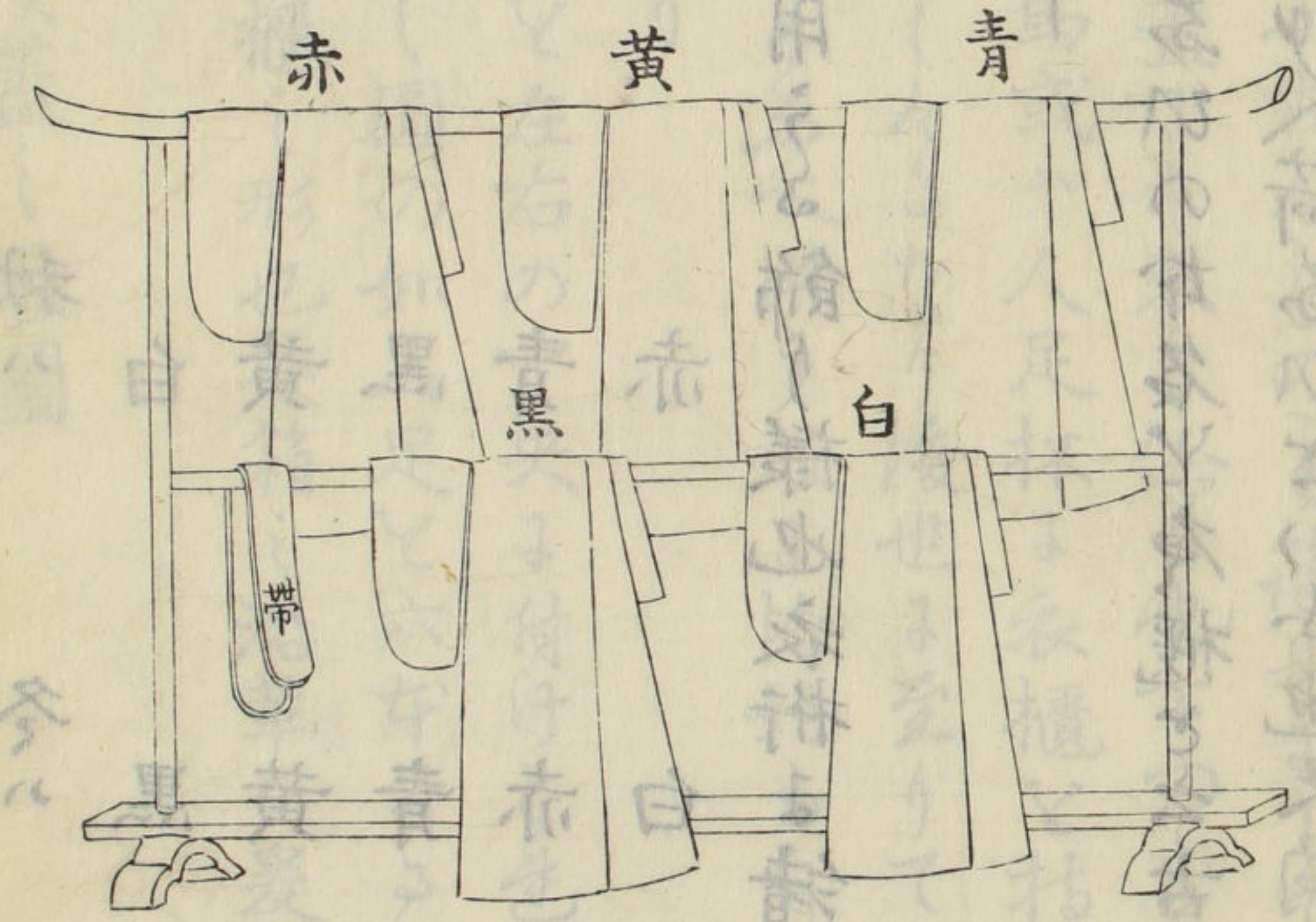
この畳の様と
 陰陽とより



三枚とも上へ
と上より帯と
二筋のへ



五枚とも下
りへと上より
一帯と一筋
これれ春の青
掛様也其他
り掛様を左
祀り如之に
色



春ハ

夏ハ

秋ハ

冬ハ

青

赤

白

黒

黄

黒

黄

赤

黄

青

白

青

赤

黒

赤

白

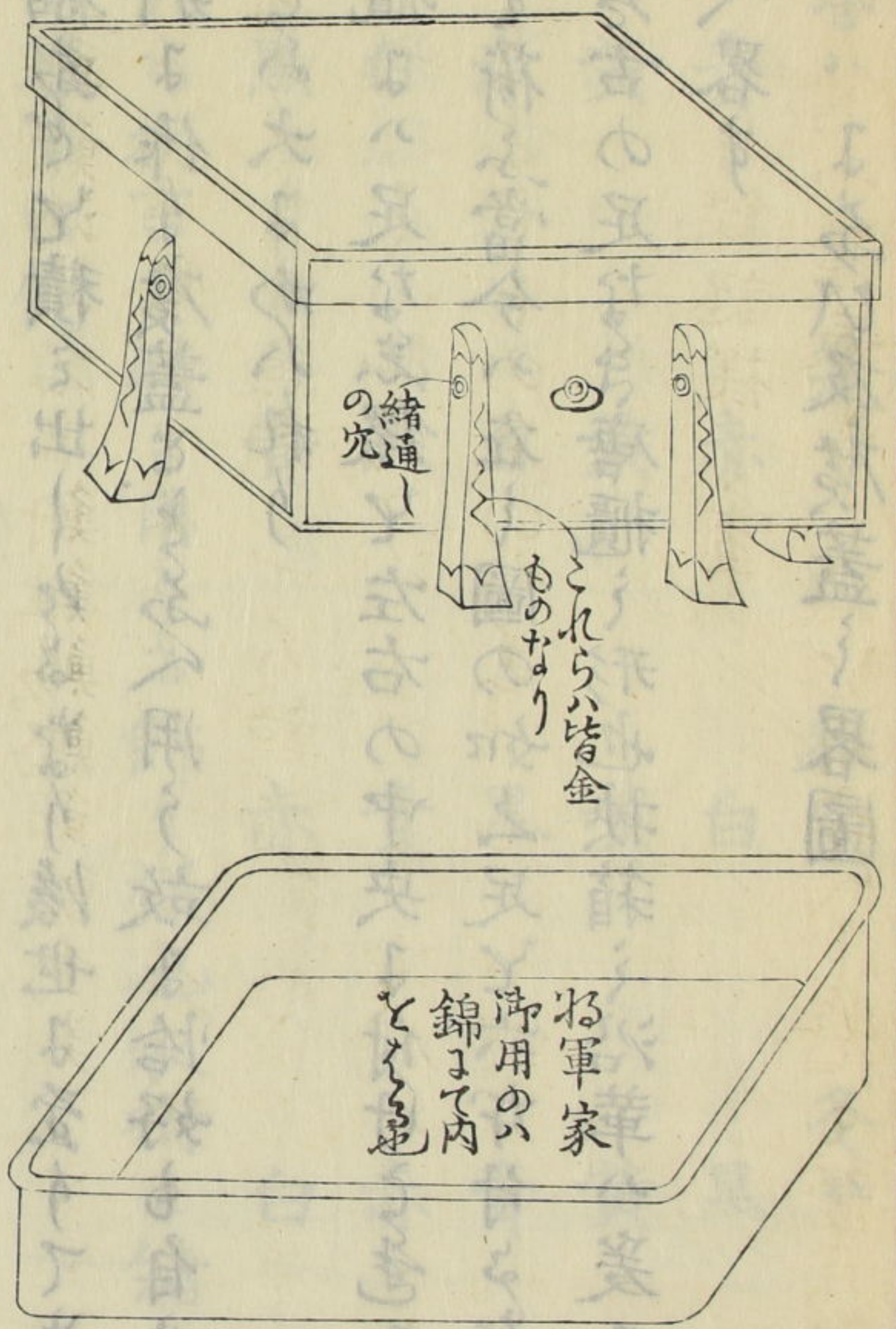
右ハ何れモ祝言ク時ニ用ユル飾リ様也衣桁ニ緒ク掛様
あきども畧す口傳

廣蓋ノ事

廣ふくむるふひの蓋也ふひの巾名ト云櫃ト云古ハ小袖
ト入色棒トてふふひもるゆへ荷ふひといふ也大内ト御

衣ト入れると御衣櫃といふ古ハ之の簡易トて人ト衣
類ト給ハる時トモ其櫃ト蓋ト申意ト給ハる也下つゝのたト
も他國へ使者ト余ト時ハ馬或ハ人足杯ト衣櫃ト持セ糸リ
其蓋ト小袖トと積ト出トるなり後世ト至リて此の蓋
ばりト別ト作り廣蓋トとふへ用フ故ト恰好ト自ラ古の
櫃のふたトハ大トカハれリ
古ハ此の櫃トハ足ト志鏝ト左右の中央ト付けト色ト緒ト
通トスリ荷ト當今ハ左ト圖の如ク足ト六ト付トるなり
今ト挾箱ト古の足トなき唐櫃ト形也挾箱ト沿革ハ爰ト記ス
要トなきト畧ス

ふひ及廣蓋ノ畧圖



疊紙の事

人より陸奥紙。大奉書。中鷹。引合。杉原。別ある也。何れも二枚重七折十四枚折形を三ツ折りそれと又横に二ツ折

る也。流義より二枚重十二折廿四枚と用う。當今を七種と音物は添へ遣す也。結納の時縁女の方へ遣す事もある也。

魚鳥貝類用捨の事

魚類にてハ鯉。鯛。海老。名吉。鮎。鮭。鰯。節。鱸。鳥類にてハ雉。鴨。鶴。つぐミ。貝類にてハ蛤。よし。たけ。ぎ。総て身と蓋とそろひたるものを用ひてハ魚類にてハ鯨。鱈。残魚。うなぎ。きより。梭子魚。飛魚。鳥類にてハ山鳥。うづ。ひぐり。雀。鳩。かし。む。む。其外姿にきよとすもの名のゆゑきものハ祝言の時用ひざるがごとし。

目錄認様の事

紙を大鷹。中鷹。小鷹。奉書。類と用ひべし。尤も豎目錄也。左

ノ認様ノ二三ノ例ト記シ置テ餘ヲこれノ準ニ依リ結納目録ノハ端書ヲ出レなきもの也併シ流義ノナリ認様カハ事もあるなり

是ヲ結納目録ノ例也

小袖	裁重
おび	何十本 一おり
あんほ	何連 一おり
きど	一巻
こい	二候
たい	二尾 一おり
多留	何枚
以上	

是ヲ七種ノ音物ノ例也廣蓋ノ積換ノ牙三卷ノ奥ノ示す

以上	
小袖	一重
狩衣指貫	一具
おび	一おり
廣蓋	一握
太刀	一腰
惠海	一頭

左ノ記スハ智ノ方ナリ三ツ目ノ贈ノ品物ノ物目録ノ一例ナリ尤モ豎目録多クノ座

これ嫁の父親
沸狩衣 一領
沸小袖 一重

誰様へ
昆布 何把
干鯛 一箱

柳樽 何荷

これ嫁の母親
卷物 何卷
己こ物 何把

誰様へ
海老 何連

多留 何荷

これ嫁の兄
末廣 一箱
素襖 一領

誰様へ
板い物 何反

柳樽 二喉
一荷

これ嫁の妹
ちりめん 何卷
己こ物 何把

誰様へ
あんほ 何把

たた以 一おり
多留 一荷

誰 ^{これ侍上薦} へ	白 ^{白^白々^々} 々	何 ^何 高
者	一折	
多 ^多 留	何荷	
白 ^白 々 ^々	何百兩小上薦へ	
同	何百兩以局へ	
同	何千兩懸女中へ	
同	何両誰へ	
同	何両誰へ	
月	己上	
日		

右に外床飾一式。饗膳一式を別紙に認免贈る。左に
 當今を奉目録として公武共々使者と奏者との間を私に目録
 と作る紙を何紙までも横目録として端書を目録に覺と認め
 それより本目録に通順として記志終りは月日と書き使者に
 姓名に肩書を主人に姓名と書也紙を二枚重上包は美濃紙
 と用う奏者に受取書も右と同じ様は認め書留は何様御使
 者何某殿と書なり

水引結様之事

巻物までも何までも水引をあると又水引を結ひは結ぶな
 他流までも水引を結ひは結ぶなと嫌ふよ水引を結ぶなと
 足らば又水引を結ひは結ぶなと嫌ふよ水引を結ぶなと
 足らば又水引を結ひは結ぶなと嫌ふよ水引を結ぶなと

きどもあれハ法はなき事也婚禮の時ハ限り水引の掛様は習ありハ傳

當今世上ハ用うる所の元結地水引といふものハ我先代京ハ水引屋ハ元結地水引ハ搦様糊加減あども教へ販賣せ止めハ所世ハこの水引ハ用うるものといつとなふ多くなるとり最初ハ主人自ら糊加減あどもあせしハ終ハ職人ハ教へ其法ハ傳へるるとり其傳世ハいろまりて今ハ何れの水引屋までも元結地の水引ハ製造販賣す其根元ハ我ハ先代ハ意匠ハ出たるものたるハ今ハ世ハ知るものなきハ至れり

文徳様及び言葉づゝの事ハ畧す

諸道具ハ事

貝桶といふハ手道具とて基所ハ具ハ至る迄姫君ハもの一通り持集あるべきもの也品数多きハ爰ハこれハ畧す

敷長持ハ事

婚姻ハ日よめ以前ハ品々の道具。卧具あども長持ハ入れて何十荷も遣はる色ハ敷長持といふ也油單ハ織物。絹又ハ木綿ハて色家ハ紋ハ付る也色ハ勝色あども

卧具ハ古ハ夜の本と祢といふ今ハこれハ蒲團といふ蒲團ハ元来蒲ハ葉ハ束祢丸ハ巻きたるものハて即ち圓座の類といふもの也

庭銭ハ事

これハ貫ざりの事也行列ヲ立つもの也貫ざりを何程ありても五百文づつとち縄をきり繋ぎ左右へ分ち左右に縄と両にあり結び紙にて其結び目ヲ封じ常の如くなり駒形に左右へかけ駒形に庭錢と書たる木札と立る也駒形とハ即ち今いふ竹馬の事なり今限は應じ何荷もあるに

諸役人装束の事

狩衣大紋を平人の衣作はあつざれども一日に晴は用をらす事もある也表向へ出ざる役人を相應に衣作たるべし女中も衣作ハ肌付帯付とも白と着用はべし式の冠後へ出ざる人と相應に衣作もさへ色直しの時より何れも色に物も着替ゆる也女中ハもも付ハ白帯付ハ赤うちりけも色

のもの多るに初筈より九月八日迄を腰巻たるべし帯を付帯金襴を用う待上臈に衣作を嫁君に衣作は準はに

諸役人へ祝義の事

それへの役人へ織物或は小袖を物板の物太刀又は金銀もても役相應に給るに又聲の方よりもそれへ相應に給るもの也右を双方とも同じ事也其内待上臈双添瓶子中取加へあどの役と勤免たるものへは双方より格別は給る物あるに

民家婚姻の部

結納の事

結納目録に紙ハ重きと輕きとよよつと奉書又は杉原に認

むらへし品数多き時は丈長と用ひべし紙を尤も二枚重懸
目録より六ツ半より巻座し墨を随分濃く摺て認むが志
淡きハ忌む也左より目録一例とあふハ置とゆへ輕重を
これより準じ認むべし

端書ハたは座のふた

鯉	雉	鯛	鱈	昆	綿	緋縮緬	白縮緬	白金
			斗布	何本	何把	何足	何卷	何西
				何連	何把	何折	何折	何番
								何喉

何鯛	何鱈
何樽	何荷
以上	
何某様	何某

右を十一種なり何れも一種宛基よのせ目録にも基よ
のせよなるを二重繰り臺ハ上。一重繰り中と心得べし
結納酒名を柳樽又を諸白と認む座し柳樽事ハ第一
巻よ奉めし記し置き多きゆへ爰に畧す諸白といふは傳あり
結納音物品揃ひた巻ハ親類并媒人夫婦と招き目録示
志祝酒と出す座し
結納し使者よを媒人同道すべし
舅方兼て結納受取人と定免置き使者衣服と同様とな

以座一音物を目錄と引合せ請取り口上へ趣きと聞取り音物と奥へ運び主人へ渡一口上へ趣きとも通し使者と座へ宰領人其外下るのものを別間へ案内一口祝と出一次多榮粉盆茶と出しそれより祝酒と出し雜煮組立飯物其外種々肴と出す時刻おきバ膳も出す也輕さをこれ準ずべし右使者へ主人挨拶も出る事もある也主人の身分を里出るに及ばば

音物と請取惣免様ハ先方より条りし目錄と通し惣免右御目錄と通歳久喜納仕を以上

月日 何某 何某様

如此認め遣すものなり民家にては結納と請取ハ大切也使者の名ハ書及及ばず

結納音物と使者へ金何百足。巻物何巻。上下一具。杉原何束。宰領人へ金何百足。杉原何帖。下るのものへ青銅何貫文ともれなと熨斗とつけ遣すべし輕さもこれ準は右に人数を兼て媒人より打合せ置と座さとのなり

翌朝媒人の方へ双方より使者と以て挨拶も遣す座し

婚姻の日限と定むる事 付里方用意の事 翌日舅の方へ媒人として賀の紋所。上下小袖の寸尺と尋事婚姻の日限とも取極む座し

里方用意の品 小袖類 地 白 白無垢

黄無垢 地 紅 地 黒 帷子類 袷類

單物類 帶 手帶 被^{カキ} 腰帶

肌着 浴衣 湯具 手拭 帽子

木綿合羽 座蒲團 駕蒲團 夜具一式 足袋

紅葉袋類

手帶とハ細帶と車紅葉袋とハ糠袋と車也

合羽といふものハ古をあきもの也いつのあろと

あハ知らざれども阿蘭陀人ノ服の上は着たるかつ

パと云物とよ糸して作りたるものなり後ハ袖と付

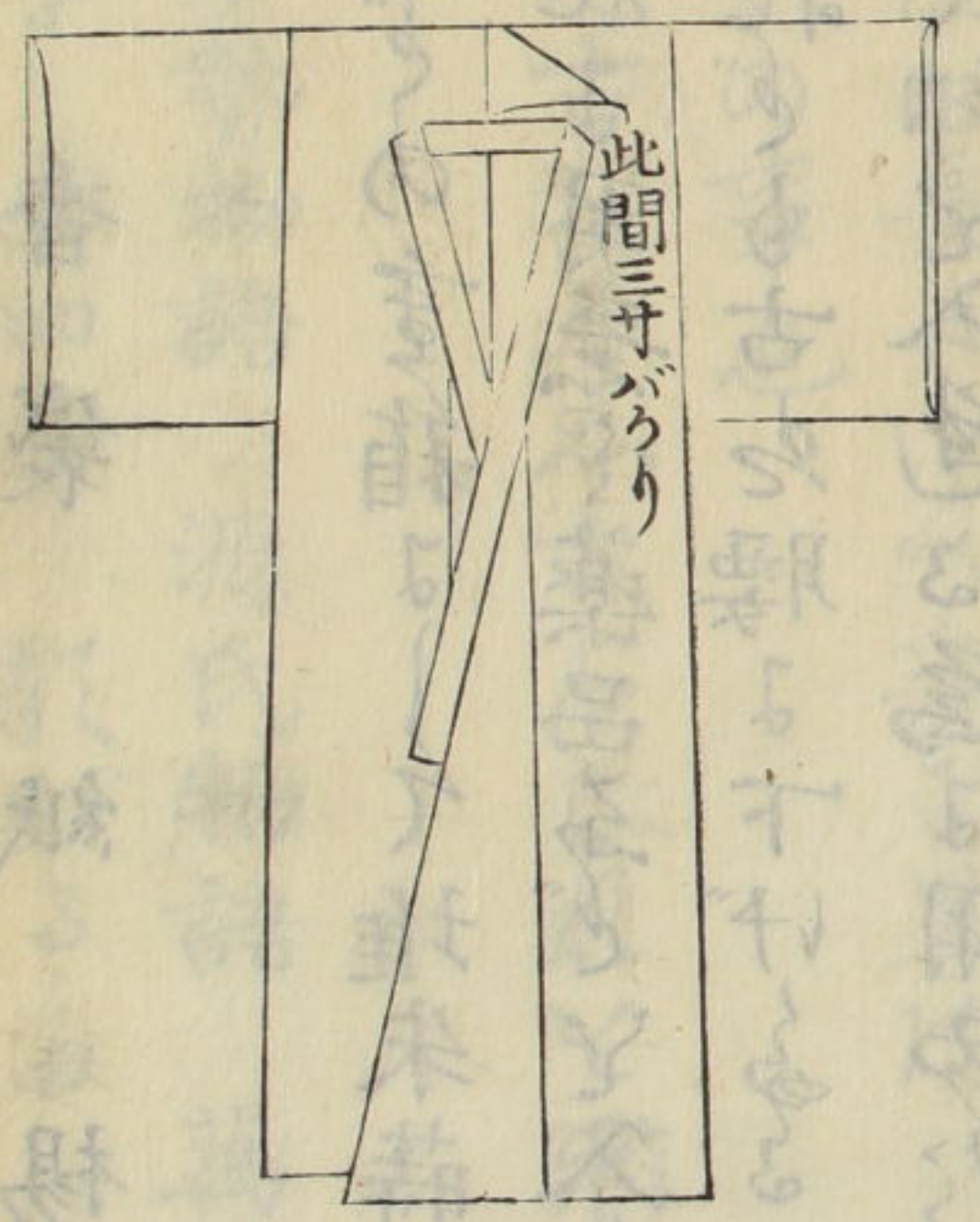
け女も着用する様はなれりカツパと云ハ阿蘭陀の

詞なり

木綿足袋も古をあきもの也古を革足袋也小紋黄華
ふど也女もこれの時を紫革の足袋と云ふもさし
公家もてを志たうづといひて指のまたのなき足袋
の如きものと用ゐらる也

被ハうらふまひとへ也袖をひろ袖本式也今ハ丸袖
にして用ゐるなり

かぢとの圖



懐中く品 香包 香袋 紙 楊枝指

鏡 印籠く類

印籠を大サ三寸ちどの重箱として堆朱蒔繪ふどよ
志ふるもの也これより用煮く薬品ふどよ入れる也今
を腰より下げ用れども古を腰より下げふるるハ志
右ハ元来唐土にて印と入色る為より用たる箱也其
形ちよとわて作りたるものハ印と入色ざれども
これと印籠といふ也

手道具く品 琴 硯箱 料紙 針指

御伽傍公 雛 小人形 犬張子 守刀

扇木子 水古引 化粧道具一式 乱箱

寄りり 缺 角赤 火熨斗 ぬき

糸類 簀 苧桶 齒黒道具一式

膳椀類一式

乱箱。齒黒道具。犬張子。角赤。水引く事ハ上より御伽傍公。
扇子ふどよ事ハ舟一巻より番之祀し置たり雛を紙雛
と用るべし雛之祝を長さゆへ爰より畧す

寄懸りハひちつき的事也

好之休といふ名を古々志古々これと平づること
いひ也

本類 百人一首 伊勢物語 源氏物語 萬葉集

榮花物語 ついで学 女四書 歌がらふ 草紙類

紙類 大鷹 小鷹 奉書 杉原

丈長 美濃紙 竹紙 半紙 色紙

短冊 卷紙類

道具類 御厨子 黒棚 貝桶 衣桁

屏風 行器 荷桶 文臺 見臺

食籠 小重箱 提重 銚子盃 火鉢

煙草盆 茶道具一式 菓子盆類 手拭掛

御厨子。黒棚。衣桁。事の上。貝桶。屏風。あどの事。ハ。一。巻。ハ。委。ト。記。一。置。きた。也。

重箱といふもの古ハ。な。一。これ。古。の。む。ぎ。折。爰。と。学。び。て。作。り。た。る。也。む。ぎ。折。爰。と。せ。い。ろ。う。と。も。云。

即ちふち高と重箱たるもの也。大永。天文の頃。ハ。ハ。巴。ハ。出来。と。ま。ど。も。菓子。肴。あ。どの。類。を。や。と。り。折。は。も。ま。り。

荒道具 灯燈 盥類 湯次 傘類

乗物 草履下駄類

灯燈といふものを上古ハ。ハ。あ。き。もの。なり。上古。を。松。明。又。ハ。行。燈。と。用。い。し。もの。也。灯。燈。を。足。利。氏。と。末。ご。ろ。と。り。出。来。し。もの。也。

部。を。見。舞。音。物。祝。義。封。金。用。意。事。

金高。と。等。差。と。袋。種。も。分。ち。杉。原。ハ。包。之。熨。斗。と。付。け。ま。ぎ。さ。ぎ。の。様。ハ。多。く。用。意。し。置。く。也。

音物に次第よりつて右に羽衣の祝義と入れ紙も次第よりつて杉原三帖五帖又を一束輕さハ半紙水引にて當年と引結び鬘斗と付け入れに座し右を兼て親役人又を女中と篤と申付け置き帳面と梅置き到來せし音物に品及祝義と出せし數多とと委と記ささしめ取紛なき様よすべし
たんす。長持其外荷物に油單と漆よ出すべし。漆色を紺花色。前黄。紋漆入。抱鬘斗或を中形。唐紗羅紗。漆紗羅紗。類何れと用をてもと

荷物之事

荷物此あらばと。此いふが媒人夫婦と招き一覽せしめ祝酒と出に座し

婚姻の前日は荷物と送る座し荷物に目錄を豎目錄よりして左記に如く認むべし多とへ増減あるも此を準じ認む座志此目錄を臺に及び

簞	箆	長	帶	衣	屏	葛	挾	外	以上	月日	何某様
筒	持	箱	折	風	籠	箱	釣	臺	雜	長	持
幾	幾	幾	幾	何	何	何	何	何	何	何	何
指	棹	箱	張	雙	荷	荷	荷	荷	荷	荷	荷
棹	棹	棹	棹	棹	棹	棹	棹	棹	棹	棹	棹

荷物之取認之様ハ先方より来りし目錄之通認め

右覚書之通荷物并鍵袋共慥に受納仕矣以上

月 日

何 某

何 某 様

右之通認め遣すべきものなり

荷物と送る時刻より以前は嫁方へ媒人智方へ行き荷物と待ち受け居る座

智方へ荷物受取役人へ心得を門口に見張り人と立せ置き荷物系もまへへおどし門とあけ置る座し荷物系れば兼て定め置きし人数にて手繰り奥へ運ぶべし荷物の人足を家家へ勝ちよきとしくども裏の方へ休息所と後置き

それにて休息させ座し表のさわごの志きといひゆへなり

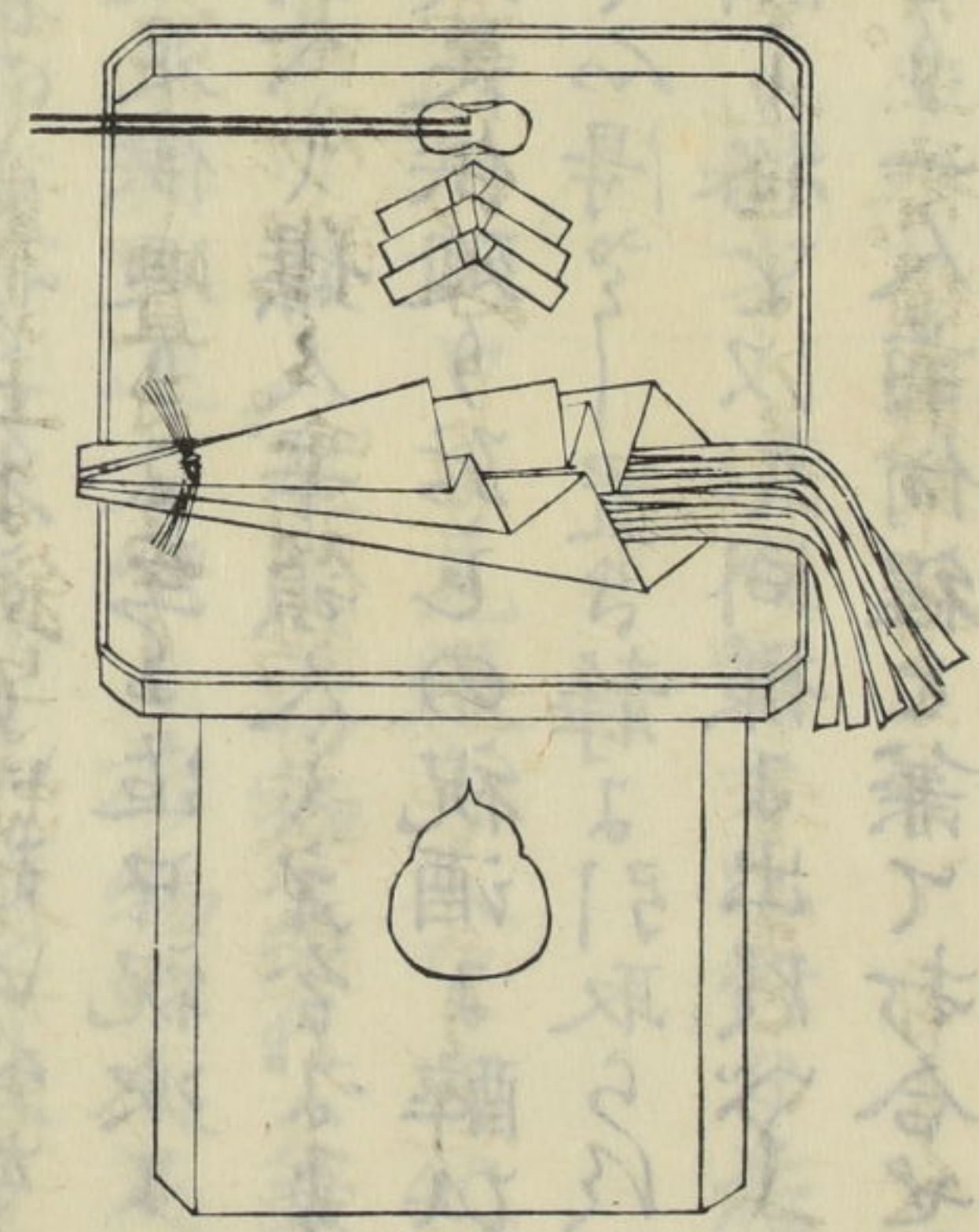
媒人及荷物宰領人より人足供廻り至る迄口祝次は祝酒と出し分限相應に馳走はぐし媒人宰領人へ分合よつて別間又は一庭よもな人足供廻り此等の祝酒は酔ひ長をせざるよふ媒人より兼て心得きし置き静に引取らるべし媒人宰領人へ祝義ハ結納の格と以て同様に出れば人足供廻りのものへは媒人より一人前何程と兼て打合せ置き去通をも送なと祝義と遣すもの也

婚姻當日の事

婚姻之日智方より迎ひは早之女義と遣すべし里方迎ひの女義供廻りへ口祝其外祝酒料理とも出すものなり

聳方待上臈と定む待上臈の事ハ一巻ノ委之記一置たり
 手掛の役人ヲ掛と持出るゝ習ひあり手掛箸始の事ハ一
 巻ノ記一ありしへ爰ノ手掛ノ畧圖と示し置とこの鬘斗包
 を當流十八番ノ折形也紙を大奉書二枚を水引を白紅々金
 銀と用るべし

結合
鬘斗
昆布



式三款。本砂加へ烹雜三款ノ事ハ上ノ銚子。蝶花形。本式床飾
 などの事ハ一巻ノ委之記一置さるゝり

嶋形ノ臺ノ松竹梅鶴龜。高砂。狸々。千羽鶴。巢喰鶴などと置さ
 るゝ臺とてて世ノ修臺といふこれハあやまり也修臺と
 いふは傳あり

押臺これヲ干肴と盛る臺也世ノこれと干肴臺といふ花を
 實立花。若松。若竹。水仙。牡丹。玉椿。福壽草。菊などと用るべし
 里方門火と焚とるゝ

嫁ノ乗物ノ守と守刀とと入色腰元乗物ノ付添ふ座し媒人
 夫婦ハ先へ次ノ兩親何れも乗物たる座し嫁ノ灯燈ハ定
 紋と付とるものなり

里方より嫁に道具と飾り様と心得るる男女二人と晝より
 聳方へ遣し嫁に部屋と飾るる
 聳方打合せの餅とつと事ハ嫁に兼物通る左右は白と据え
 男女二人宛りてつとべし委き事ハ牙一巻に記し置きたり
 此の打合せの餅にて鏡一重と取り三方より床に飾るべ
 志其残りたる餅と雑煮に用うる事ハ其家の先格よまか
 座し

嫁に兼物と式臺へすゑる時待上臈玄関に控へ居り手燭と
 もち嫁に化粧し間へ案内す嫁に跡より又添守と守刀と
 持ち来る座し本式に次牙を牙一巻に委し記し置る
 床に飾りたる手掛引渡銚子と此あいつよそれの役人へ

渡し置く座し

嫁に待上臈化粧し間より社家へ誘引し上座へ着座せしめ
 待上臈を直し聳に左の方へ聳より先へ着座す又添を嫁に
 右の方より着座す夫より聳へ案内す聳出て嫁と對座するも
 のなり待上臈に添し着座し次牙を座敷に模様よよつてか
 いる事ある座し

上方より此座敷と主殿又酒殿とも云ふ得置く座し
 手掛三方箸始に次牙を手掛に役人手掛三方と持ち出嫁と
 聳とへ口祝とあきて勝手へ入る座し
 手掛相濟し時續て里方役人聳へし土産物と臺よのせ上へ
 鬘斗包と付け持出ると待上臈受取り聳方に役人へ渡す役

人徳取り聳の部屋へ置之又勝手にて徳取渡しとなす事也
 あるなり時宜よき座し
 右土産物之目錄認め様を左に一例と記し置之目錄之紙
 と奉書二枚重折目錄なり

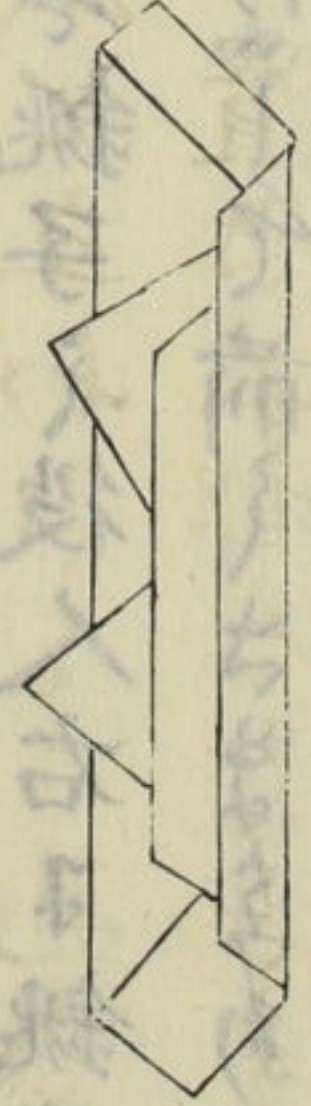
小	上	お	何	多
そ	下	少	少	少
て	び	き	き	き
一	一	一	一	一
重	重	重	重	重
				お
				り

續て三々九度之式と行ふ其次舟を銚子に後人右に銚子と
 持ち引渡し三方のトジメと向ふなして前へさまなり左に
 舟と平子入色さきと舟持ち加へて連れ出結びとなきて嫁へ
 持て来る舟添其盃と取り嫁へ渡し嫁三献集れば舟添其盃
 と受取り露と志多と元と如くさきて砂人へ渡す砂人これ
 と聳へ持て来る聳へ三献集る聳其盃と下へ繰りさげ二枚
 目の盃と取り上げ又三献集る露と志たと砂人へ渡す砂人
 これと嫁へ持て来る嫁へ三献集る舟添前へ如く盃と取扱
 となきて其盃と下へ繰りさきと舟添目と盃と取り嫁へ渡す嫁
 三献集れば舟添其盃と露と志たと砂人へ渡す砂人聳へ
 持て来る聳へ三献集るさきとこれと三々九度相済むゆへ砂

人を加へと連巻入結びとなきて勝まへ入る座一右よ委と
記はといへども猶習ひあり右よ羽うる引渡を三ッ蓋と組付
け多る引渡也蓋を尤も土器三枚重也此の圖ハ第一巻に記
志置きたり

瓶子に圖ハ第一巻に瓶子に取扱様を上よ委と記し置きたり
聳りの色直しの小袖を廣蓋よの色包熨斗と付け三々九
度内よ役人持ち出取添へ渡すべし渡し様は習ひあり右
に小袖よを目錄と付るよ及バに
前よ記す聳への土産小袖あどの熨斗包を當流く折形十七
番よ包む座し

十七番折形之圖



嫁入聳入とも座敷に次の間へ屏風と立わきとり見へざる
様よして萬事心得たる人と付け置さ不都合なきよ小総
てし事は注意以多さ座し

床飾

手掛

結燈臺

雄瓶子

同子

土器下輪

鏡

餅紅白熨斗

昆布

卓香爐

雌瓶子

提

結燈臺

此処へ松一色立華と
用い事もあるなり

引渡

嶋 臺

組重。羽盛。船盛。押臺ハ床殿へ置之べし
座後ハ燭臺ハ蠟燭をさしさらば立替へ座し

色直ハ次身

聳を三々九度相濟むと直ハ部座へ入る待上臈も同ト聳を部
座より小袖上下ト着換へ色直ハ案内ト待つ嫁ハ双添と
もハ化粧ハ恠へ入り色直ハ小袖ト双添嫁ト着せのへ自分
も着のへ同ト色直ハ案内ト待つなり

間敷あき色直より座後とあり座し

待上臈を嫁ハ休息所へ行き色直ハ案内トな志嫁ハ両親ト
座後ハ誘引ハ上座へ着座せしめ次ハ聳ハ方ハ案内ハ聳ハ

両親ト誘引して嫁ハ両親ト對座せしむ双方ハ親類あつふ
事ハ時宜よき座し

次ハ双方ハ媒人ハいで着座す媒人一人ハ時ハ双方便宜ハ所ハ
着座す座し

双方着座あき口祝ハ役人ハ掛三方ト持出聳嫁とのぞき
上より媒人追ハ熨斗トさみ勝手へ入る時勝手より奈良
臺ト持ち出座後ハ正面ハす志置座し

色直ハ盃も三々九度ハ如ク引渡して以て加へとも三飲ハ
系座しこの盃ハ結び様ハ其時ハ人数ハさきハ愛ハ
何より定め定免置座しといへども嫁ハ親よりハ免聳
ハ親へ夫より子ハ盃ト納盃ト聳ハ親ハなる様ハ結ぶ座

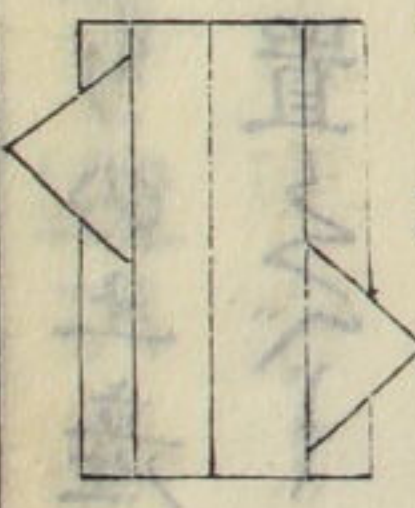
志右色直く盃を人数次第は飲敷と定め書付と拵へ媒人は
 渡し置く媒人の盃を室履にならざる様よこの書付はとつ
 る砂人へ指圖すべし盃納まれれば砂加へとも勝事へ入る
 也此の盃事の済む迄ハ尤無言とせよこれと無言の
 盃といふ

色直く盃相済し時聲く親よりとめて挨拶し夫より一座
 くの五は挨拶す挨拶おわれれば勝事より盃臺は三組との
 せ持ち出づこれより暖酒多き座し銚子を蝶花形と付け
 る銚子と用ふるもあり又蝶花形と付けざる銚子と用ふる
 事もある也蝶花形と付けざる銚子と用ふる時を銚子と蓋
 となく座しこれより烹雜三飲は移る初飲は組室二飲雜煮

羽盛。船盛。三飲鬻く物。押臺右相濟色ハ夫より本膳と出し
 この料理とも出す又添待上臈同座より相伴す飲立は次
 を爰は畧す

嫁に飯を常器椀は高と盛りかさし蓋はに又添へ得食事
 きはべし世よりれと鼻つと沸騰といふは傳あり
 烹雜三飲は向付は大き土器と用ふる時を下輪香立氣束と
 用るべし小皿と用ふる時ハ下輪香立氣束と用ふる
 包餅と用ふる時ハ餅は厚サ一寸二重長サ三寸二分幅二寸五分
 る座し右を尤も當流折形相老包みは包み水引二把より引結び
 田作り二腹合せより刺座し

五番之内。相老包



色直く盃相濟く三ツ組と出れば少く前より里方々の土産物と
役人持ち出披露し次ぐ間へ土産物とあつべ置くべし目錄
を媒人より聳の親へ出れば聳の親其目錄と披見し嫁の親へ
挨拶す此時嫁の親を色直く小袖と禮と述べ置し時宜くと
言は土産物と勝手まで渡す事もあるなり

右の目錄を惣目錄としてし惣急様の上は委しく記し惣目
録は準じ認むるに

手代其他の色のへハ折目錄として榎のせ勝手まで渡
るに

中酒の事先づ三ツ組と出し次は引盃、銚子と出れば引盃より初
然二款三款と然五款と集り三ツ組としてし三ツ組の盃は二枚目

く盃と嫁の親より飲みてめ順くは廻す聳の親を三枚目く
盃まで飲みて急急順くは廻し嫁の親より初急なる二枚目
く盃と聳の親まで納め聳の親より初急なる三枚目く盃を
嫁の親まで納むる也この盃の間は種々の料理と出れば
右半は相濟免バ湯次水次と出し挨拶ありて膳と徹し直は
菓子茶と出れば茶を煎茶するに菓子ハ縁高は入色楊枝と
そへ座し輕さもく色は準じべ志

聳入の事

其夜聳入あつば里方役人兩親入宅次第は聳と迎ひは集る

座一 聳方を迎ひの役人。供廻り迄は口祝と出し手早く祝酒
とも出すべし。當時ハ勝手と申し聳入は両親及び親類とも
媒人誘引すこれハ畧義ノ事と心得座一
聳入は節ハ床は鏡餅ハいらば口祝引渡。銚子あどハ勝手ハ
置之べし。休息所其外ハ次ハ聳方ハ準じべし
聳入は嫁ハ土産ハ袖上下と着用すべし
聳入ハ時ハ口祝結び盃ハ仕様嶋臺の出様并土産物の披露
三ツ組盃ハ次ハ押臺膳部。中酒菓子茶あどと出するハ嫁入
ハ時と同日事なり。聳入ハ結び盃ハ時嫁ハ親より聳へ腰
物と出す渡ハ様取様ハ習ひあり上ハ委之祀し置たり
聳入ハあいあハ親類。嫁ハちうづさハ盃事ありて嫁ハ土産

物ハ挨拶となは家々格よりりて手代。高頭あどハ嫁ハよ
ろらびと申土産物ハ禮と述ふる事もあるなり
聳入とあまハ両親。聳入宅ハ時ハ嫁勝手ハ又ハ玄關迄ハ添
と連れ迎ひハ出るものなり

座福ノ事

待上臈聳と誘引し上座へ着させし。免次ハ嫁と誘引し
對座せしめ座福ハ一献と行ふせよこれと床盃とハ一
子ハ冷酒と入れ持ち茶色ハ聳盃と取上ハ三献系り嫁ハ嫁
三献系りて聳へ聳三献系りて納むるもの也。左ハ座福ハ一
一例とあり置と

座福ハ一献 三方ハ左ハ通据るなり

小角香立氣束

削物

小角

下水

鬘斗五

耳土器

稻穗

小角

一枚盃

土器
足角

箸

同

榮螺

昆

布五

榮螺なま時をかち栗と用ふべし

床に取様を北枕よりべし其間都合よりて床枕とな志
てもとより夜具ハ里方用意の夜具と用為床取り終て待上臈
聲と案内し次は嫁と誘引し床よりすゑ換扱し退て添腰
元を次へ間居る座し

翌朝の事

風呂に用意ある座し
夫婦に膳は田造繪と付け軽き料理と出すべし
部屋飾りを聲方と申合せ飾る座し
手掛引渡鉋子比三程を床に飾り置る座し
多とのせ置るものなり
手掛ハ鬘斗と
貝桶を部屋に床照を飾り置る座し
御厨子黒棚衣桁飾りし手ハ上は委之祀し置さるり
部屋見舞し
里方より部屋見舞は檜肴菓子あごと送る座し
部屋見舞し方ハ先づ床にある手掛と持ち出口祝となし次は

祝酒膳部とも出し嫁對面あきて志多しとすべし其人より
 分よよつて對面せざる事もあるなり
 部屋見舞い人多き時は嫁食事調へ難きゆへ小サキ屯食チンシキと拵
 へ食籠ふどへ詰め置き炊添心得食事さし座し
 智方到來品受取人より定免置き到來し品并樽し印とも番と
 帳面より免置き其節入れしぬめとも祀し置ともこの也部座
 も同様なる座し

三ツ目之事

嫁里方へ禮よ系る日限ハ七日迄く肉多きども當今を三ツ
 目よ系るなり里方より智方へ嫁し迎ひし女義と遣すべし
 迎ひの女義供廻りへ口祝祝酒膳部とも出すべし嫁し土産

物と行器は餅或は白蒸と詰め樽肴と添へ釣臺よて嫁より
 先へ宰領人付添ひ送るべし里方よて右に宰領人より人足
 よ至る迄へ口祝祝酒と出し祝義とも遣は也嫁里へ行くとす
 先づ両親智へ挨拶し夫より氏神へ系指し里へ行と座し嫁
 里方よ居る内よ智より樽肴ふどと送る里方より両親と
 初免智へ同様よ送る座し輕きもこれよ準は

五ツ目之事

嫁し迎ひし智方より男女と遣す里方よて右迎ひの男女へ
 祝酒と出は座し嫁し土産物其外中へてし事ハ三ツ目之時
 の如く座し

祝し到來せし先へ答禮し事

祝と到来せし先へを部を申合せ支配人と定免答禮すべし
尤も到来し品よりハ念と入るもの也

媒人其他へ挨拶の事

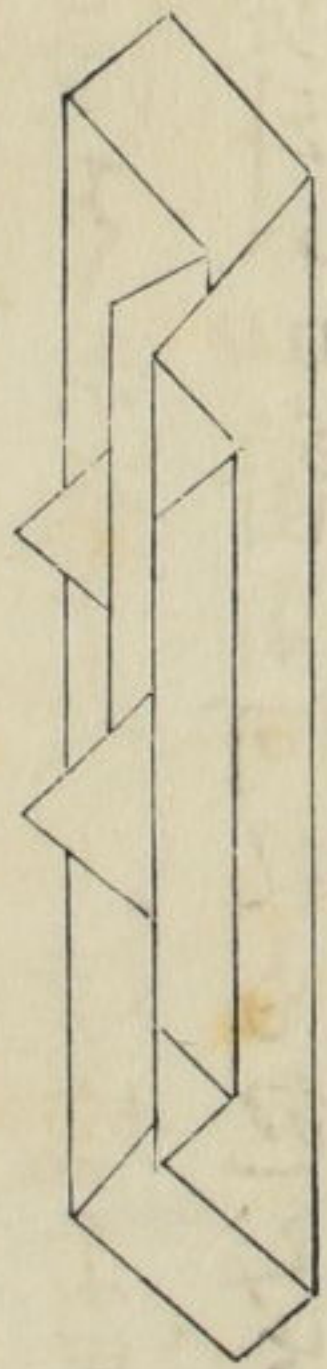
媒人へハ双方申合せ互に廉末なき様子使者と以て音物と
送る座し待上薦双添其他役より人へも同様を送る座し然
きども役し次第よりつゝ音物は甲乙と付と座し

弘めく白蒸の事

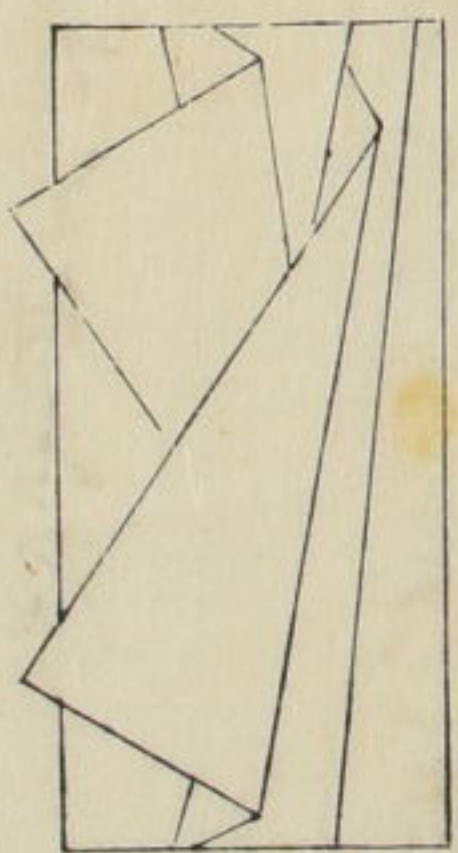
白蒸ハ餅米一石二斗黑豆一斗と凡百軒分と定む重箱は大
小を色ども先づおの積りと以て用意すべし焼塩は黒胡
麻とまぜ當流し折形五番は熨斗ハ四番は何れも包み生半
と水引もて結ぶべしかいしはハ南天と用う又白蒸は大

豆焼塩は白胡麻と用ても若しおらば

四番附熨斗



五番之内祝の塩包



嫁廻禮の事 付膝直の事

姑又を親類し老母までも嫁と誘引志親族其他へ廻禮す世
よりこれと禮あるきといふ土産物を里方と針糸色ども双方
申合せ甲乙なき様より座し其後九ツ目迄は膝直しとして親
類又を賀し朋友あごとと招き嫁ちかづき多免し酒宴と開

之字もあるなり

箸之寸法之事

手掛之箸八尺二寸引渡及座幅之款の箸八尺九寸も両口た
る座一



生間流式法祕書抄卷之二 早

